茨城県行方郡麻生町

喜平台南遺跡

調査報告書

平成14年9月
茨城県行方郡麻生町教育委員会
麻生町喜平台南遺跡調査会

例　　言

1、本報告書は、茨城県行方郡麻生町島並に所在する喜平台南遺跡の調査報告書である。

2、喜平台南遺跡は、平成10年度に実施した埋蔵文化財分布調査では、台地北側で確認されている周知の遺跡である。

3、今回実施した調査区域は、喜平台南遺跡の南側で同一台地上に所在することから同一遺跡と判断して調査を実施した。調査は、土砂採取事業に先行する調査である。

4、本遺跡の調査は、平成13年５月に確認調査を実施し同年７～８月に本調査を実施した。調査は、麻生町教育委員会の指導・協力を得て藤原　均（常総考古学研究所・日本考古学協会員）が担当し、本調査は調査会を組織して実施した。組織は別項に記す。

5、本報告書では、挿図・写真図版・挿表等の目次を作成せずその都度関係図版等を表示した。また縮尺・水糸レベル・遺物の縮尺は、その都度表示し遺物の位置は床面よりの高さをcmで示した。

6、本報告書は、関川　宏・藤原　均・荒井英樹の３名が執筆した。分担は以下の通りである。

⑴、Ⅱは関川　宏

⑵、Ⅴ－６の縄文式土器・石鏃は荒井秀樹

⑶、⑴と⑵以外の各項は藤原　均　　である。

7、本遺跡の調査に際して、下記の方々の協力が有ったので記して謝意を表する。

茨城県教育庁文化課、（財）茨城県教育財団、茨城県県南教育事務所、麻生町教育委員会、麻生町町史編纂室、（社）行方広域シルバー人材センター、土子建材、山田禮二（茨城県埋蔵文化財指導員）
橋本豊榮・高木俊博・関川　宏・高木和明（麻生町教育委員会）、辺田　弘・宮内賢志・植田敏男・平輪一郎（麻生町文化財保護審議会）、土子久成（土子建材）、
鬼沢まさ子・茂木ふみ・箕輪フミエ・千々崎マツ・岡野アサ子・箕輪トシ・板橋シツ・大川義久・清宮久（以上麻生町）、山田安男・三好彦治・山本英雄（以上鹿嶋市）、加藤美智子・園部八重子・新海静子・鈴木桂子（以上佐倉市）

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅲ　調査の経緯 …… 1
Ⅳ　調査結果の概要 …… 5
Ⅴ　遺構と遺物 …… 6
　1、住居跡 …… 6
　2、炉跡 …… 8
　3、土坑 …… 9
　4、溝 …… 11
　5、その他の遺構 …… 11
　6、出土遺物 …… 12
Ⅵ　まとめ …… 15
Ⅶ　報告書抄録

調査会組織図

喜平台遺跡調査会

会長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長
副会長	辺田　弘	麻生町文化財保護審議会会長
理事	宮内賢志	麻生町文化財保護審議会委員
同	植田敏男	麻生町文化財保護審議会専門調査員
同	平輪一朗	同上
同	藤原　均	調査担当 常総考古学研究所
同	土子久成	土子建材
同	高木俊博	麻生町教育委員会生涯学習課課長
監事	小室　旭	麻生町出納室長
幹事	関川　宏	麻生町教育委員会生涯学習課
	高田和明	麻生町教育委員会主事

喜平台遺跡調査団

団長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長
副団長	高木俊博	麻生町教育委員会生涯学習課課長
調査担当	藤原　均	常総考古学研究所、日本考古学協会員
作業員	地元協力者	
事務局	関川　宏	麻生町教育委員会
	高田和明	麻生町教育委員会主事

Ⅰ　遺跡の位置と環境

当遺跡は、茨城県行方郡麻生町島並に所在している。麻生町は、茨城県の南東部で北西から南東方向に伸びる行方台地の東部に位置し、北側の北浦と南側の霞ケ浦とに挟まれている。

行方台地は、霞ケ浦と北浦に流入する河川により台地の内陸部まで開折さりており、複雑な舌状台地形成している。台地の内陸部は、比較的広く標高30m代の台地となっているが、内陸部から先端部にかけては標高26m代で狭い台地となっている。

当遺跡は麻生町の中央部で、霞ヶ浦に流入する城下川水系西側上流部の谷津に面しており、遺跡南端部で東西にわかれている部分に、当遺跡が所在している。当遺跡の周辺には、縄文時代～中近世までの遺跡が多数所在している。当遺跡の北側で同一台地上には、同一時期の喜平台北遺跡（３）・喜平台東遺跡（４）と南供養塚（13）があり、西側の台地上には縄文時代～中世までの堀ノ内遺跡（８）・新地遺跡（５）が所在している。また北方の台地には前山遺跡（６）・杉平遺跡（７）・鳴井遺跡（11）等の遺跡が所在している。

また麻生町の遺跡としては、縄文時代から中近世までの遺跡が299ケ所周知されている。これらの遺跡は、北浦と霞ケ浦とに流入する河川に面した台地上で、沿岸部に集中する傾向を有しているが、内陸部では減少する傾向を有している。（第１・２図）

Ⅱ　調査に至る経緯

当遺跡の調査は、平成13年４月に土子建材より麻生町島並806－１で土採取事業の計画があり、これについて埋蔵文化財の有無に関する紹介があった。これにより教育委員会は、同月26日に現地確認・踏査を実施したが、雑木が繁茂していたため立ち入る事が出来なかった。しかし該当する地区は、喜平台南遺跡として周知されている遺跡に隣接しており、同一遺跡であることと推定されることから確認調査が必要であることを、４月26日に回答した。

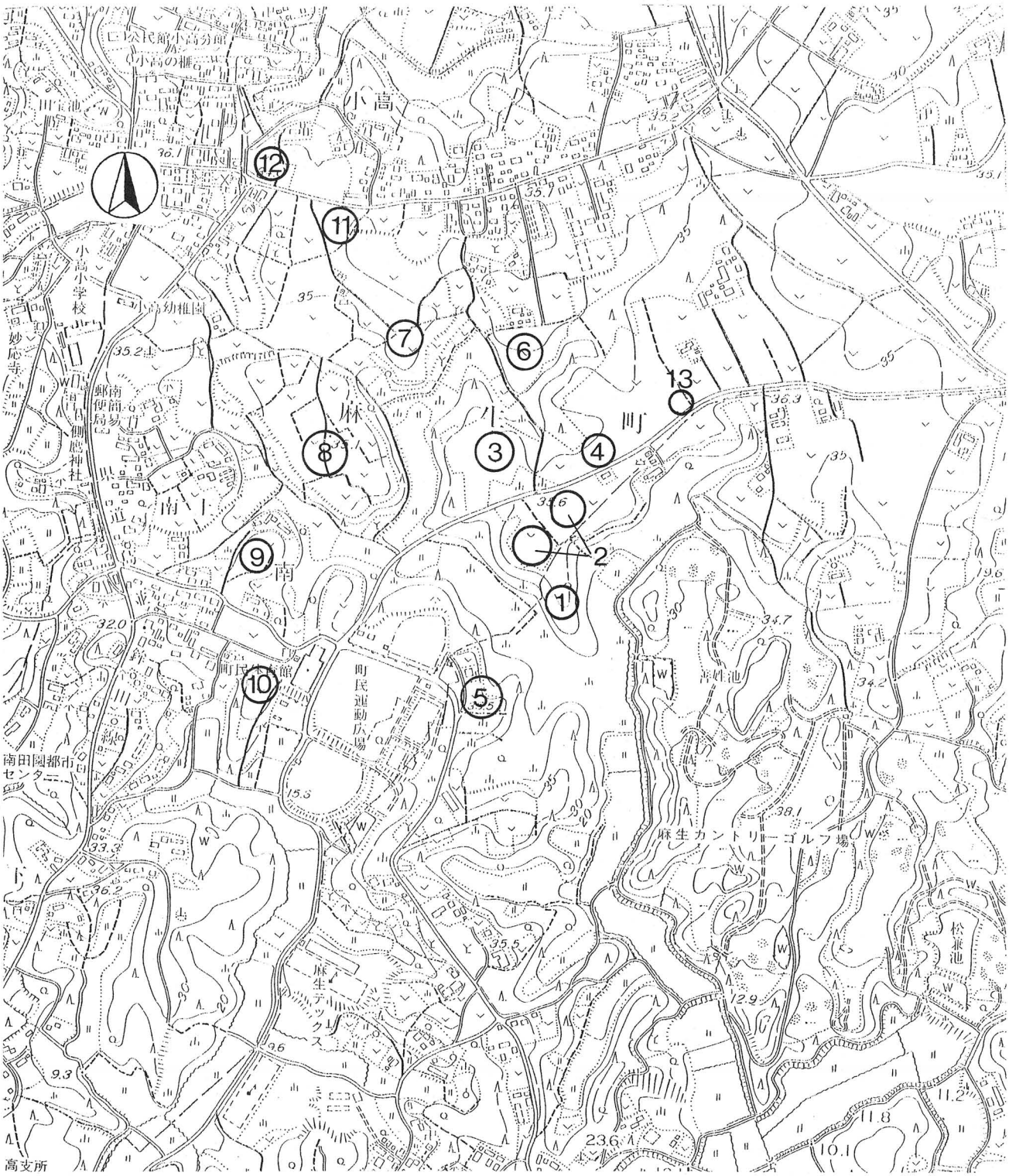
これにより確認調査を５月10日に実施し、住居跡が確認されたため喜平台南遺跡と同一遺跡であることを認定した。５月14日に確認調査の結果を報告し、土子建材と今後の対応を協議した。この結果、現状保存・維持は困難であるという結論から、記録保存としての発掘調査を実施することで合意にいたった。また遺跡名は、確認調査の結果から「喜平台南遺跡」とした。

発掘調査は、喜平台南遺跡調査会を組織して実施することとし、７月２日に調査会を発足させて調査を開始した。調査は、藤原　均氏（日本考古学協会員、常総考古学研究所）に依頼した。

Ⅲ　調査の経緯

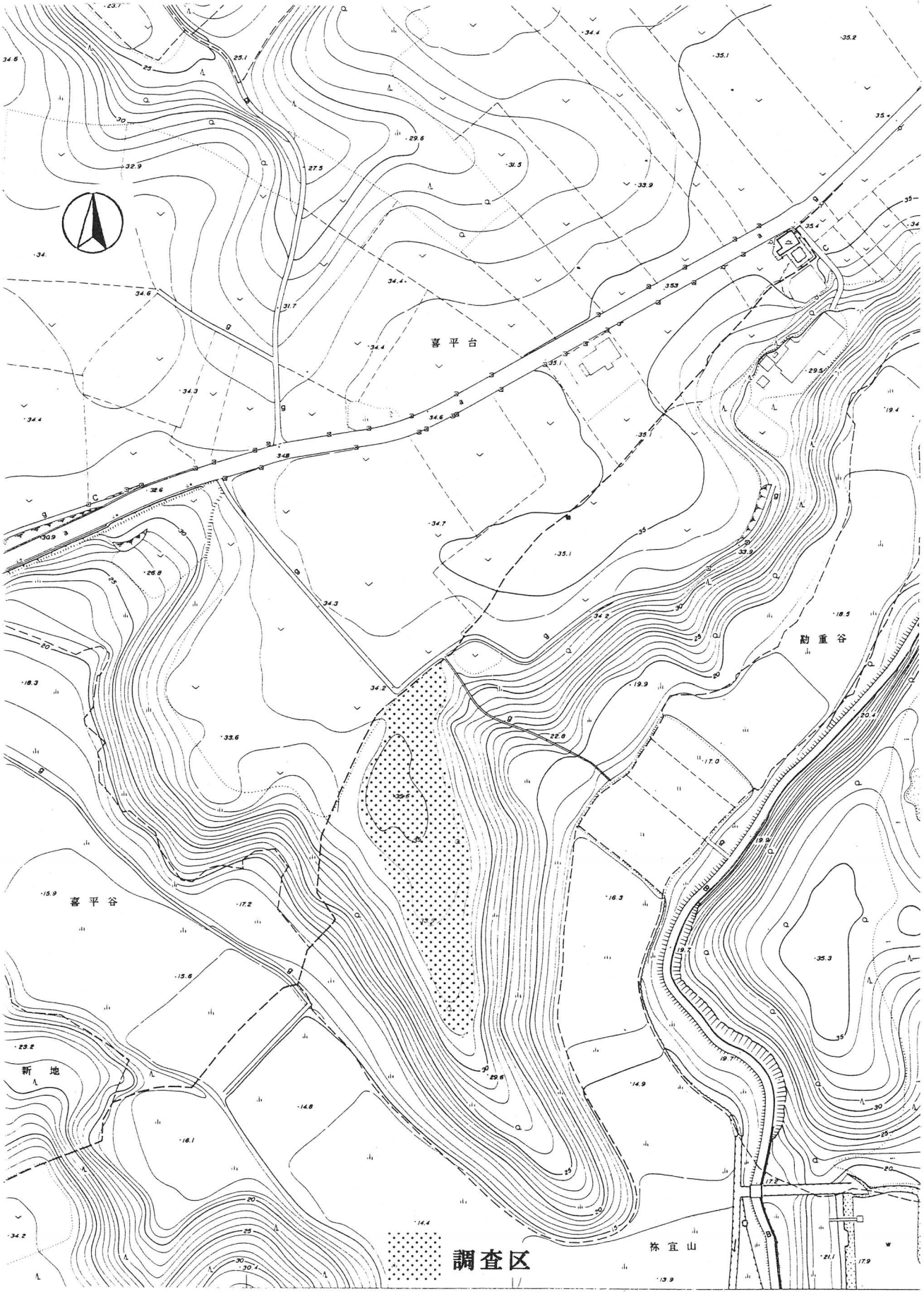
喜平台南遺跡の調査は、平成13年７月２日より開始した。調査は表土除去より開始し、７月５日に終了した。この後に精査行ない奈良・平安時代の住居跡２軒、縄文時代の住居跡９軒、土坑29基と溝１条及び多数のPitを確認し７月10日に終了した。

遺構の調査は、７月11日より住居跡から開始し７月20日に終了した。この後土坑の調査を行ない、29基の土坑は炉跡（６基）・陥し穴（６基）・土坑（13基）であることを確認し８月２日に終了した。溝の調査は８月10日より開始し、８月12日に終了した。ここで全景写真撮影と遺構全測を実施し、土坑の調査中に発見した不明遺構の調査を行ない８月16日に終了した。整理等は、９・10月に実施した。

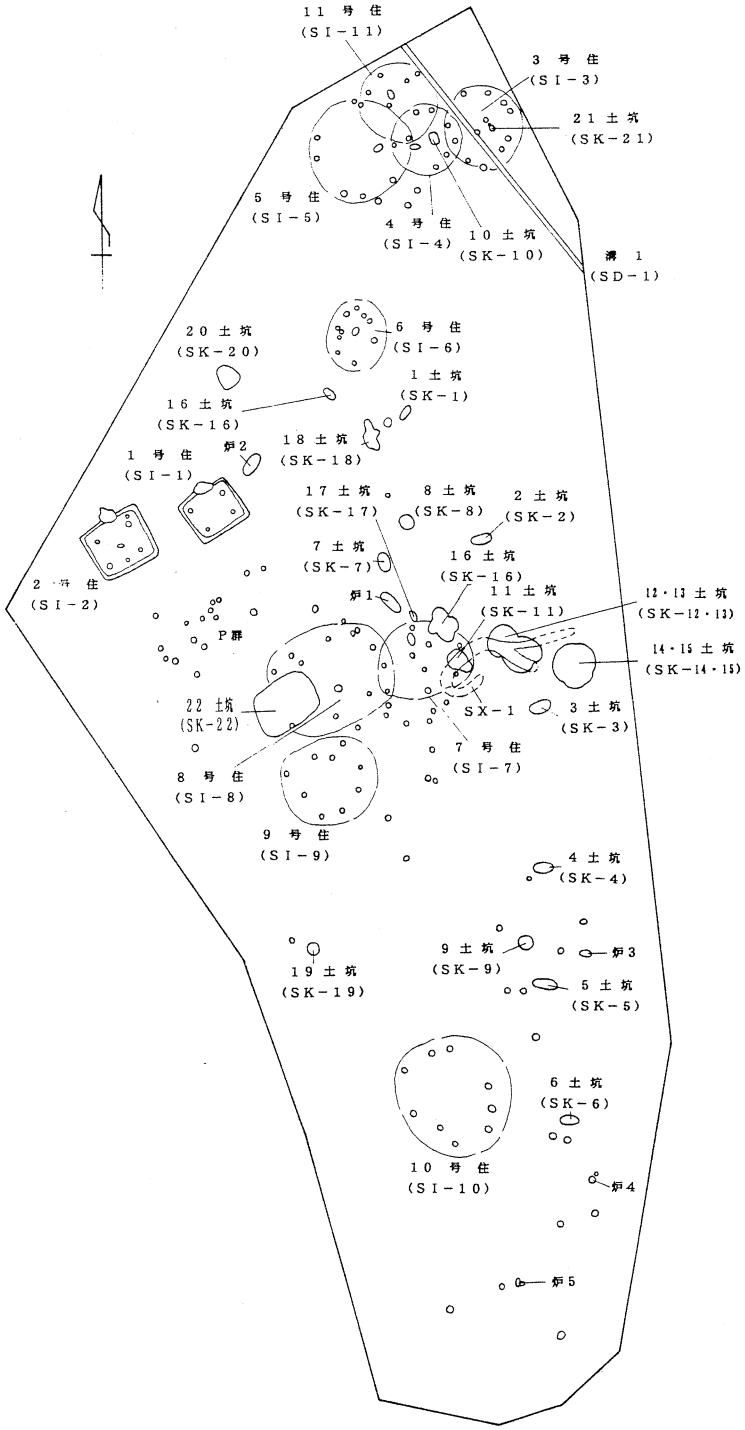


1、調査地点　　5、新地遺跡　　9　、日光台遺跡　　１３、南供養塚
2、喜平台南遺跡　6、前山遺跡　　１０、荒地遺跡
3、喜平台北遺跡　7、杉平遺跡　　１１、鳴井遺跡
4、喜平台東遺跡　8、堀ノ内遺跡　１２、原権現台遺跡

第１図　遺跡位置図　（S＝１：10,000）



第２図　遺跡付近地形図　（Ｓ＝１：2,000）



第 3 図 遺 構 全 測 図 （S＝1：500）

Ⅳ　調　査　結　果　の　概　要

喜平台南遺跡の調査結果は、第３図・第１・２表・図版１に示したように11軒の住居跡と、23基の土坑と炉跡５基及び溝１状と多数のＰit群・不明遺構２基を発見・調査した。住居跡は奈良・平安時代の住居跡２軒と、縄文時代の住居跡が９軒である。炉跡は５基で、土坑としては陥し穴が６基と土坑が５基であり残りの土坑13基は攪乱土坑である。

奈良・平安時代の住居跡は、調査区の南西部で発見されているが、調査区の中央部以南と北側では確認されなかった。縄文時代の住居跡は、調査区の中央部以北で８軒発見されているが南側では１軒発見されたのみで、炉跡と柱穴で発見された住居跡である。また北西部では、３軒の住居跡が重複している。このことから縄文時代以降の集落は、調査区の西側に広がっていることと判断される。

５基の炉跡は、調査区の北側に多く所在しているが、南側では２基が所在するのみで楕円形・円形を呈している。炉跡は土坑として調査を開始したが、焼土が有り底面も焼けていることから炉跡とした。

23基の土坑で６基の陥し穴は、調査区の東側平坦部で東西方向に掘り込まれており、楕円形・長方形状を呈している。規模は同程度で、ほぼ等間隔に掘り込まれている。土坑は調査区の中央東側に４基と北東部に２基が有り、円形・楕円形・長方形を呈している。縄文時代の土坑である。他の土坑は、攪乱土坑である。

溝は調査区の北東部で、北西～南東方向に掘り込まれており、中近世の溝と推定される。Ｐit群は、調査区のほぼ全域で認められている。

第１表　遺　構　一　覧　表　1

名称	形状	規模(m) 東西	南北	深さ	方位	柱穴	カマド 炉跡	備考
第 1号住居跡(SI- 1)	隅丸長方形	4、60	4、20	0、38	N－37°－W	4	北壁中央部	西壁が東壁より短くカマド東袖は破壊されている
第 2号住居跡(SI- 2)	墨丸長方形	3、80	3、53	0、38	N－35°－W	5	北壁中央部	西壁が東壁より短い、埋設甕有り
第 3号住居跡(SI- 3)	円　　形	5、35	5、20		N－17°－E	10	中央に2基・円 形	SI-4・SD-1と重複
第 4号住居跡(SI- 4)	楕　円　形	4、90	6、20		N－30°－W	7	中央西側・楕円形	SI-3・5・11及びSK-10と重複
第 5号住居跡(SI- 5)	楕　円　形	8、50	7、20		N－40°－E	11	中央部・楕円形	SI-4・11及びSK-10と重複
第 6号住居跡(SI- 6)	楕　円　形	3、20	4、20		N－15°－E	10	中央部・楕円形	
第 7号住居跡(SI- 7)	楕　円　形	6、50	5、30		N－73°－E	13	中央部・円形状	SK-11・16と重複
第 8号住居跡(SI- 8)	円　形　状	8、00	7、50		N－60°－E	10	中央部南側・楕円形	SK-23と重複
第 9号住居跡(SI- 9)	楕　円　形	6、80	8、10		N－19°－W	10	中央部東側・円形	攪乱土坑2基有り
第10号住居跡(SI-10)	楕　円　形	5、70	7、10		N－50°－W	9	南側・円 形	
第11号住居跡(SI-11)	円　形　状	6、00	6、30		N－13°－W	6	中央北西側・楕円形	SI-4・5及びSK-10と重複
炉　跡 － 1	楕　円　形	0、70	1、86	0、18	N－50°－W			
炉　跡 － 2	不整長方形	1、02	1、72	0、15	N－15°－E			
炉　跡 － 3	円　　形	0、43	0、42	0、05	N－10°－E			
炉　跡 － 4	楕　円　形	0、72	0、42	0、08	N－74°－E			
炉　跡 － 5	楕　円　形	0、50	0、38	0、05	N－80°－W			

第２表　遺　構　一　覧　表　2

名称	形状	法量(m) 東西	南北	深さ	方位	備考
第 1号土坑(SK- 1)	隅丸長方形	0、80	1、16	1、25	N－38°－E	陥し穴
第 2号土坑(SK- 2)	楕　円　形	1、30	0、75	1、65	N－65°－E	陥し穴
第 3号土坑(SK- 3)	隅丸長方形	1、37	0、70	1、52	N－70°－E	陥し穴
第 4号土坑(SK- 4)	楕　円　形	1、30	0、75	1、70	N－85°－E	陥し穴
第 5号土坑(SK- 5)	楕　円　形	1、32	0、79	1、45	N－85°－W	陥し穴
第 6号土坑(SK- 6)	楕　円　形	1、65	0、95	1、90	N－ 0°－E	陥し穴
第 7号土坑(SK- 7)	不整長方形	1、05	1、20	0、15	N－40°－E	焼土有り、攪乱土坑
第 8号土坑(SK- 8)	楕　円　形	1、08	1、23	0、18	N－60°－W	焼土有り、攪乱土坑
第 9号土坑(SK- 9)	不 整 円 形	0、85	0、90	0、28	N－27°－W	攪乱土坑
第10号土坑(SK-10)	隅丸長方形	0、65	0、95	0、20	N－20°－W	ＳＩ－４・５と重複
第11号土坑(SK-11)	楕　円　形	1、20	1、37	1、50	N－35°－E	ＳＩ－７と重複、下位にＳＸ－１有り
第12号土坑(SK-12)	楕　円　形	1、64	2、05	1、27	N－30°－E	ＳＸ－１と重複
第13号土坑(SK-13)	隅丸長方形	1、50	2、40	0、35	N－72°－E	ＳＸ－１・２と重複
第14号土坑(SK-14)	楕　円　形	6、00	5、70	1、90	N－63°－E	ＳＫ－15と重複、フラスコ状土坑
第15号土坑(SK-15)	楕 円 形 状	3、80	0、70	0、50	N－35°－W	ＳＫ－15と重複、フラスコ状土坑
第16号土坑(SK-16)	楕　円　形	0、48	0、87	0、13	N－30°－W	攪乱土坑
第17号土坑(SK-17)	楕　円　形	1、45	2、38	0、60	N－27°－W	攪乱土坑
第18号土坑(SK-18)	不整楕円形	0、70	2、35	0、35	N－20°－W	攪乱土坑
第19号土坑(SK-19)	楕　円　形	0、70	1、07	0、52	N－50°－W	攪乱土坑
第20号土坑(SK-20)	不　整　形	1、63	1、60	0、30	N－48°－W	攪乱土坑
第21号土坑(SK-21)	円　形　形	0、70	0、64	0、50	N－80°－E	ＳＩ－３と重複
第22号土坑(SK-22)	不 整 方 形	4、50	4、40	0、78	N－ 0°－E	風倒穴
第 1号 溝 (SD-1)					北東～北西	全長39、5m・幅1、90~2、70m、深さ0、70m
不 明 遺 構(SX-1)					東西	全長20、5m・幅1、80m・高さ1、80m・表土下0、50~1、10m

Ⅴ　遺　構　と　遺　物

1、住　居　跡

第１号住居跡（ＳＩ－１、第４・15図、第３表、図版２・５）　本跡は調査区の北西部に所在し、東西方向に長軸を有し北壁にカマドを有する住居跡であるが、西壁が北方に突出し東壁より短くなっている住居跡である。床面は中央部が堅緻な床となっているが、壁付近は柔弱な床となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマドを除き全周している。柱穴は対角線状に４本認められ、土層は明褐色土がレンズ状に堆積しており、細分すると３層に分類される。

カマドは北壁中央部のやや西側に設置されているが、中央部南側と東側の袖が木根により破壊されて

いる。遺存部分での大きさは、長さ1,10m・幅0,96m・高さ0,35mを計測する。燃焼部はカマドの中央部に位置するが、焼土の堆積は認められず黒褐色土（第２・３層）堆積しており、底面もあまり焼けていない。煙道部は燃焼部より斜めに立ち上がっており、先端部は北壁より0,35m程突出している。壁は砂質の暗褐色土を用いて構築しており、粘土は用いられていない。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・坏・須恵器甕・盤・高台付坏・坏蓋・石製紡錘車が破片で出土し、床面と床面付近からは須恵器坏蓋・土師器甕が出土している。カマド内からは、土師器甕・須恵器高台付坏・土師器甕が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、須恵器盤（１）・高台付坏（２・６）・坏蓋（３）、土師器甕（５）、石製紡錘車（４）の６点である。

第２号住居跡（ＳＩ－２、第５・15図、第３表、図版２・５）　本跡はＳＩ－１の西側で、東西方向に長軸を有し北壁にカマドを有する住居跡であるが、西壁が東壁より短くなっている住居跡である。床面は全体的に堅緻で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝はカマドの部分を除き全周しており、柱穴は対角線状４本と中央南側に１本の５本認められた。また中央部には、楕円形の浅い掘り込みが認められたが、柱穴であるかは不明である。土層は明褐色土がレンズ状に堆積しており、細分すると３層に分類される。中央部の掘り込みには、第２層が堆積している。

カマドは北壁中央部に設置されており、長さ1,83m・幅1,70m・高さ0,50mを計測する。燃焼部はカマドの中央部で赤褐色土（第４層）堆積しており、下位のローム面も良く分解している。煙道部は、燃焼部より中段にテラスを形成しながら緩やかに立ち上がり、先端部は北壁より0,55m程突出している。壁は砂質の暗褐色土と粘土を用いて構築しているが、粘土の使用量は少量である。

出土遺物としては、覆土内より土師器坏・甕、須恵器坏・坏蓋などが破片で出土しており、床面からは土師器甕が出土している。またカマドの東側には、土師器甕が埋設された状況で出土している。カマド内からは、土師器甕・坏、須恵器坏蓋が出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは土師器甕（７・８・10）、須恵器坏蓋（９・11）の５点である。

第３号住居跡（ＳＩ－３、第６図、図版３）　本跡は調査区の北東部で、第４号住居跡（ＳＩ－４）と第22号土坑（ＳＫ－22）と重複しており、第１号溝（ＳＤ－１）に中央部を切られ炉跡と柱穴で確認された住居跡である。住居跡は楕円形状を呈しており、柱穴は10本（Ｐ1～Ｐ10 ）認められたが小さく浅い柱穴である。炉跡は円形で中央部に二ケ所認められたが、焼土の堆積は無くロームが焼土化しているのみである。また東側の炉跡は、第21号土坑（ＳＫ－22）に南側を切られている。本跡の床と壁の状況は不明であり出土遺物も皆無である。

第４号住居跡（ＳＩ－４、第６図、図版３）　本跡は調査区の北東部で、第３・５・11号住居跡（ＳＩ－３・５・11）と重複しており、ＳＤ－１に北東部を切られ炉跡と柱穴で認められた住居跡である。住居跡は楕円形を呈しており、柱穴は７本（Ｐ11～Ｐ17）認められたが小さく浅い柱穴である。炉跡は楕円形を呈し、中央西側に所在している。炉跡内には焼土が堆積しており、底面も良く焼けている。本跡の床と壁の状況は不明であり、出土遺物は皆無である。

第５号住居跡（ＳＩ－５、第６図、図版３）　本跡は調査区の北東部で、ＳＩ－４・11と重複し炉跡と柱穴で認められた住居跡である。住居跡は北東方向に長軸を有する楕円形状を呈しており、柱穴は11本認められたが小さく浅い柱穴である。炉跡は楕円形で中央部に所在するが、住居跡の方位より36°北を向いている。炉跡内には焼土が堆積しており、底面も良く焼けている。本跡の床と壁の状況は不明であり、出土遺物も皆無である。

第６号住居跡（ＳＩ－６、第７・16図、第４表、図版３・６）　本跡は調査区の北側中央部に所在し炉跡と柱穴で認められた住居跡である。住居跡は楕円形を呈しており、柱穴は10本認められたが小さく

浅い柱穴である。炉跡は楕円形で中央部に所在し、焼土が堆積しているが浅い炉跡であり、底面はあまり焼けていない。本跡の床と壁の状況は不明であるが、炉跡の周辺より縄文式土器片が６点出土している。この６点の土器片から１点を図示（第16図１）した。

第７号住居跡（ＳＩ－７、第７図）　本跡は調査区の中央部に所在し、第８号住居跡（ＳＩ－８）及び第11・16号土坑（ＳＫ－11・16）と重複しており、炉跡と柱穴で認められた住居跡である。住居跡は楕円形状を呈しており、柱穴は13本認められたが小さく浅い柱穴である。炉跡は中央東側で円形状呈しているが西側は攪乱により破壊されている。炉跡には焼土が堆積しているが、浅い炉跡で底面はあまり焼けていない。本跡の床と壁の状況は不明であり、出土遺物も皆無である。

第８号住居跡（ＳＩ－８、第７・16図、第４表、図版６）　本跡は調査区の中央部で、ＳＩ－７及び第23号土坑（ＳＫ－23）と重複し、炉跡と柱穴で認められた住居跡である。住居跡は大型で円形状を呈しており、柱穴は13本認められたが小さく浅い柱穴である。炉跡は中央部南側で楕円形を呈しており、浅いが良く焼けている炉跡である。本跡の床と壁の状況は不明であり、出土遺物としては推定範囲内より８点の縄文式土器片が出土している。この８点より２点を選び図示（第16図２・３）した。

第９号住居跡（ＳＩ－９、第８図）　本跡は調査区の中央部西側で、炉跡と柱穴で認められた住居跡である。住居跡は楕円形を呈しており、柱穴は10本認められたが小さく浅い柱穴である。炉跡は中央部東側で円形であるが、焼土の堆積は認められずローム層が焼土化している。本跡の床と壁の状況は不明であり、北東部には木根による攪乱坑がある。出土遺物は皆無である。

第10号住居跡（ＳＩ－10、第７図、図版３）　本跡は調査区の南側中央部で、炉跡と柱穴で認められた住居跡である。住居跡は楕円形を呈しており、柱穴は９本認められたが小さく浅い柱穴である。炉跡は南側で円形を呈しており、焼土が堆積しているが浅い炉跡で底面はあまり焼けていない。本跡の床と壁の状況は不明であり、出土遺物も皆無である。

第11号住居跡（ＳＩ－11、第６図、図版３）　本跡は調査区の北東部で、ＳＩ－３～５及び第１号溝（ＳＤ－１）及び第10号土坑（ＳＫ－10）と重複しており、炉跡と柱穴で認められた住居跡である。住居跡は円形状を呈しており、柱穴は６本認められたが小さく浅い柱穴である。炉跡は楕円形で北西部に所在しており厚く焼土が堆積し底面も良く焼けている。本跡の床と壁の状況は不明であり、出土遺物も皆無である。

２、炉　　跡

炉跡１（第８図・図版３）　本跡は調査区の中央部で、ＳＩ－７の北西部に所在し楕円形状を呈しており、南側に一段のテラスを有している。底面は平坦で、中央部が0.18ｍでテラス部は0.08ｍの深さを計測し、壁は斜めに掘り込まれている。焼土は中央部底面東側で、厚く(5.0cm）堆積しており下位面も良く焼けている。土層は茶褐色土と黄褐色土が堆積しており、茶褐色土が２層に細分される。土層の堆積状況は自然堆積を示しているが、第１層の茶褐色土が厚く堆積している。出土遺物は皆無である。

炉跡２（第８図・図版３）　本跡は調査区の北西部で、ＳＩ－１の北東部に所在し楕円形状を呈し南壁には楕円形の掘り込み（深さ0.05ｍ）がある。底面は平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。焼土は底面中央部と南側掘り込みの部分に堆積しているが、中央部の焼土は薄く南側では厚く堆積している。焼土の下位面は、南側が良く焼けているが中央部はあまり焼けていない。このことから南側が中心と推定される。土層は茶褐色土と焼土が堆積しており、茶褐色土が２層に細分され焼土は南側掘り込み部に堆積している。出土遺物は皆無である。

炉跡３（第８・17図、第５表、図版３・６）　本跡は調査区の南側で、第５号土坑（ＳＫ－５）の北東部に所在し円形状を呈している。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれており、深さ0.05ｍを計

測し焼土が堆積している。炉跡内の底面と壁は、良く焼けている。出土遺物としては、炉跡上面より縄文式土器片が１点出土しており、第17図38に図示した。また本跡の北東部には、円形のＰitが所在しているが関係は不明である。

炉跡４（第８・17図、第５表、図版３・６）　本跡は調査区の南側で、ＳＩ－10の南東部に所在し東西方向に長軸を有する楕円形の炉跡である。炉跡内には焼土が堆積しているが、底面と壁はあまり焼けていない。また本跡の北西部には、円形の小Ｐitが１本認められたが本跡との関係は不明である。出土遺物としては、炉跡の上面より縄文式土器片が１点出土している。（第17図39）

炉跡５（第８図）　本跡は調査区の南側に所在し、北西方向に長軸を有し楕円形状を呈する炉跡である。底面は平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。炉跡内には焼土が堆積しており、底面と壁は良く焼けている。出土遺物は皆無である。

３、土　　坑

第１号土坑（ＳＫ－１、第９図、図版４）　本跡は調査区の中央北側で、ＳＩ－６の南東部に所在している。東西方向に長軸を有する楕円形を呈し、底面には浅い掘り込みと小Ｐitが１本認められ壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、西壁は上部が斜めに掘り込まれている。土層は、茶褐土と黒褐色土がレンズ状に堆積しており、茶褐色土が２層に細分される。出土遺物としては、覆土の１・２層から少量の縄文式土器小片が出土しているが、図示不能である。遺構の状況から本跡は、陥し穴である。

第２号土坑（ＳＫ－２、第９・16図、第４表、図版４・６）　本跡は調査区の中央部で、ＳＩ－７の北東部に所在している。東西方向に長軸を有する隅丸長方形状を呈し、底面は平坦で壁は西・南壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、西壁には深さ0.85ｍの部分にテラスを造り出している。土層の堆積状況は、ＳＫ－１と同様である。出土遺物としては、覆土の１・２層より少量の縄文式土器片が出土しており、１点（第16図10）を図示した。本跡は、ＳＫ－１と同じ陥し穴である。

第３号土坑（ＳＫ－３、第９図）　本跡は調査区の中央部東側で、ＳＩ－７の南東部に所在しており東西方向に長軸を有する隅丸長方形状を呈しているが、底面は上面よりやや南東を向いている。底面は平坦であるが、南壁部分に小さいテラスを有しており、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、茶褐色土・黒褐色土・黄褐色土がレンズ状に堆積しており、茶褐色土が２層に細分される。出土遺物は皆無であるが、ＳＫ－１・２と同様陥し穴である。

第４号土坑（ＳＫ－４、第９図、図版４）　本跡は調査区の中央南東部に所在し、東西方向に長軸を有し楕円形状を呈している。底面は平坦で、壁は北・西壁がほぼ垂直に掘り込まれているが、東・南壁は斜めに掘り込まれている。土層は、茶褐色土と黒褐色土がレンズ状に堆積しており、茶褐色土が２層に細分される。出土遺物は皆無であるが、ＳＫ－１～３と同様陥し穴である。

第５号土坑（ＳＫ－５、第９・16図、第４表、図版４・６）　本跡は調査区の南側で、ＳＩ－10の北東部に所在しており、東西方向に長軸を有する楕円形状を呈している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、茶褐色土と黒褐色土がレンズ状に堆積している。出土遺物としては、覆土の１・２層内より少量の縄文式土器片が出土しており、３点（第16図11～13）を選び図示した。本跡はＳＫ－１～４と同様陥し穴である。

第６号土坑（ＳＫ－６、第10・16図、第４表、図版４・６）　本跡は調査区の南側で、ＳＩ－10の東側に所在しており、東西方向に長軸を有する楕円形を呈している。底面は狭く平坦であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、茶褐色土と黒褐色土がレンズ状に堆積しており、茶褐色土が３層に細分されるが９層の茶褐色土には焼土粒子が少量ふくまれている。出土遺物としては、覆土の４層内より

縄文式土器片が出土しており、10点（第16図14～18・20～22）を図示した。本跡は、ＳＫ－１～５と同様陥し穴である。

第７号土坑（ＳＫ－７、第10・16・17図、第４・５表、図版６）　本跡は調査区の中央部で、ＳＩ－７の北側に所在し不整長方形状を呈している。底面は平坦で、壁は斜めで東・西壁の中央部には焼がある。土層は、軟質で締まりの無い茶褐色土がレンズ状に堆積しおり、３層に細分される。出土遺物は、縄文式土器片が少量出土しており４点（第16・17図19・23～25）を図示した。攪乱土坑である。

第８号土坑（ＳＫ－８、第10・16図、第５表、図版６）　本跡は調査区の中央部で、ＳＩ－７の北東部に所在し楕円形状を呈している。底面は皿状で、壁は斜めに掘り込まれており北東部と南壁には焼土が堆積しているが、壁は焼けていない。土層は茶褐色土が堆積しており、３層に細分されるがＳＫ－７と同質の土層である。出土遺物としては、縄文式土器片が少量出土しており２点（第17図26・27）を図示した。遺構と土層から本跡は、ＳＫ－７と同じ土坑と判断される。

第９号土坑（ＳＫ－９、第10図）　本跡は調査区の南側で、ＳＩ－10の北東部に所在し不整円形状を呈している。底面は皿状で、壁は斜めに掘り込まれている。土層は茶褐色土が堆積しており、ＳＫ－７８と同質で３層に細分される。出土遺物は皆無であり、ＳＫ－７・８と同じ土坑である。

第10号土坑（ＳＫ－10、第６・17図、第５表、図版６）　本跡は調査区の北東部で、ＳＩ－４・５と重複し隅丸長方形を呈している。底面は平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。土層は黒色土が１層堆積しており、縄文式土器片が出土している。縄文式土器は、７点を図示（第17図28～34）した。土層の状況から本跡は、ＳＩ－４・５を掘り切っている土坑である。

第11号土坑（ＳＫ－11、第10・17図、第５表、図版４・６）　本跡は調査区の中央部で、ＳＩ－７及び不明遺構（ＳＸ－１）と重複し楕円形を呈している。底面は平坦で、壁は0.60ｍまでは斜めに掘り込まれてからほぼ垂直に掘り込まれている。また東壁の上面は、攪乱により破壊されている。土層は茶褐色土が堆積しており、４層に細分されるが８層はＳＸ－１の土層である。出土遺物は、縄文式土器片が少量出土しており３点（第17図35～37）を図示した。

第12・13号土坑（ＳＫ－12・13、第11図、図版４）　本跡は調査区の中央東側で重複しており、底面ではＳＸ－１・２と重複している。ＳＫ－12はＳＫ－13を掘り切っており、ＳＸ－１・２はＳＫ－12の底部を掘り切っている。ＳＫ－12は楕円形を呈しており、北東部にテラスを有している。底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。またテラス部は、平坦なテラスであるが西にかけて緩やかに下降している。土層は茶褐色土がレンズ状に堆積しており、細分すると３層に分類される。また４層の黄褐色土は、ＳＸ－１の土層である。出土遺物としては、少量の縄文式土器小破片が出土しているが図示不能である。ＳＫ－13は楕円形を呈しており、底面は平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土層は、茶褐色土がレンズ状に堆積しており３層に分類される。出土遺物は皆無である。

第14・15号土坑（ＳＫ－14・15、第12図、図版４）　本跡は調査区の中央東側に所在しており、重複した状況で発見されておりＳＫ－14がＳＫ－15を切っている。ＳＫ－14は楕円形を呈しており、底面は平坦であるが北東壁の部分に長方形（－0.15ｍ）と円形（－0.25ｍ）の掘り込を有している。壁は中央以下がほぼ垂直に掘り込まれているが、上面にかけてはフラスコ状に掘り込まれている。ＳＫ－15は楕円形状で、中央部をＳＫ－14に掘り切られている。底面は皿状を呈するようであり、壁はフラスコ状に掘り込まれている。土層は茶褐色土と黄褐色土が堆積しており、茶褐色土が６層に黄褐色土が４層に分類される。出土遺物としては、少量の縄文式土器小破片が覆土上面より出土したのみで、図示は不能である。出土層位は、第１～３層中である。

第16号土坑（ＳＫ－16、第10図）　本跡は調査区の北側で、ＳＩ－６の南西部に所在しており、楕円

形を呈している。底面は皿状であり、壁は斜めに掘り込まれている。土層は１層で、茶褐色土が堆積しているが軟質な土層である。出土遺物としては、縄文式土器の小破片が１点出土したのみで、図示不能である。本跡は、ＳＫ－７・８と同じ遺構である。

第17号土坑（ＳＫ－17、第11図）　本跡は調査区の中央部で、ＳＩ－７の北側に所在し楕円形を呈しているが、遺構の状況から木根と判断された。少量の縄文式土器小破片が出土しているために土坑として報告する。第18号土坑も本跡と同様である。

第18号土坑（ＳＫ－18、第12図）　本跡は調査区の中央北側で、ＳＩ－６の南側に所在し不整楕円形状を呈しているが、遺構の状況からＳＫ－17と同様木根である。少量の縄文式土器小破片が出土しているために、土坑として報告する。

第19号土坑（ＳＫ－19、第12図）　本跡は調査区の南西部に所在し、楕円形を呈しており南壁の部分にテラスを有している。底面とテラスは平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。土層は軟質な茶褐色土が１層堆積しているが、出土遺物は皆無である。

第20号土坑（ＳＫ－20、第12図）　本跡は調査区の北西部に所在しており、不整形を呈している。底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。また北壁の一部には、焼土が堆積しているが壁は焼けていない。土層は軟質な茶褐色土が堆積しており、３層に分類される。２・３層には炭化物を含むが、焼土の堆積は認められなかった。ＳＫ－７・８と同様の土坑である。

第21号土坑（ＳＫ－21、第６図）　本跡は調査区の北東部に所在し、ＳＩ－３と重複しており円形を呈している。底面は平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。土層は１層で、黒褐色土が堆積している。出土遺物は皆無であるが、覆土が第１号溝（ＳＤ－１）と同質であることから同溝と同時期と推定される。

第22号土坑（ＳＫ－22、第13図）　本跡は調査区の中央西側で、ＳＩ－８と重複しており不整方形状を呈している。底面は平坦な階段状なっており、壁は斜めの部分と垂直の部分とが混在している。土層は中央上面にロームブロックがあり、この下位に茶褐色土が堆積している。出土遺物は茶褐色土より少量の縄文式土器小破片が出土している。本跡は土坑ではなく風倒穴と判断さりるが、遺物が出土していることから土坑として報告する。

４、　溝　（第14・16図、第４表、図版６）　本跡は調査区の北東部で、北東～北西にかけ直線的に掘り込まれており、ＳＩ－３と11を掘り切ってい。底面は平坦であるが、西側で東側とに段差を有している。溝の壁は斜めに掘り込まれている。土層は黒褐色土と黒色土が堆積しており、出土遺物はカワラケ土師器坏・須恵器坏等の小破片と縄文式土器片が出土しており、縄文式土器片を６点図示した。

５、その他の遺構（第13・14・17・18図、第５表、図版５・６）　その他の遺構としては、調査区の西側で認められたＰit群と、東側で認められた不明遺構とがある。Ｐit群は、円形状で浅い掘り込のＰitで住居跡としてのプランが認められなかったことからＰit群とした。西側に焼土域を有するがこの焼土はロームが焼けている部分で耕作攪乱に伴う焼土域である。不明遺構は、ＳＫ－11・12の調査時に認められたトンネル状で、深さ0,50～1,50ｍの部分で径0,55～0,95ｍで掘り込まれており、ＳＫ－13の下位で東（ＳＸ－１）と南（ＳＸ－２）に別れている。出入り口は東と西のようである。内部には茶褐色土が縄文式土器片を含み堆積している。土器片は第17図45・57に図示したが、土坑に伴う遺物と推定される。

6、出　土　遺　物　（第15～18図、第３～５表、図版５・６）

土師器・須恵器・石製品（第15図、第３表、図版５）

Ｎｏ１～11は、ＳＩ－１・２よりの出土遺物で１～６はＳＩ－１より出土し、７～11はＳＩ－２より出土している。１は須恵器盤でやや歪な器形であり、肥厚な底部である。２は須恵器高台付坏の接合資料で、体部を1/3程度遺存している。体部には輪積み痕を有しており、高台部先端外面を外開きさせている。３は須恵器坏蓋の接合資料で、摘みの宝珠部を欠損している。やや歪な器形で、体部上半にはヘラ削りヘラナデが施されている。４は滑石製の紡錘車であるが、下半を欠損している。５はカマド内より出土した土師器甕で、1/3程の破片で口縁部を肥厚化させている。６はカマド内より出土した須恵器高台付坏で、体部を欠損しておりやや歪な器形と推定される。体部下端がやや下方にさげられており、高台部は長方形状を呈している。７はカマドの東側に埋設されていた土師器甕で、口唇部のごく一部を欠損しているが完形品であるが、やや歪な器形である。８は土師器甕で体部下半以下を欠損しており、遺存率は1/5～1/6程度でやや肥厚な器厚である。９は須恵器坏蓋で、摘みの宝珠部は楕円形状を呈しており体部はロクロ整形でヘラ削り等は見られない。10は土師器甕の接合資料で、体部下端以下を欠損し1/5程の破片である。体部上半が薄い器厚で、口唇部が薄い器厚となっている。11はカマド内より出土した須恵器坏蓋で、1/2程の破片である。肥厚な器厚で摘みの宝珠は低くなっており、体部中半にはヘラ削りヘラナデが施されている。これらは奈良・平安時代の遺物である。

縄文式土器・石鏃（第16～18図、第４・５表、図版６）

縄文式土器と石鏃は、第16～18図Ｎｏ１～58、第４・５表に示した。１はＳＩ－６よりの出土で、沈線と貝殻腹縁文が施文されている田戸下層式の土器片である。２・３はＳＩ－８よりの出土で、２は沈線を施文し３は条線文が施文されている。２は田戸下層式で、３は安行Ｉ式期に比定される。４～９はＳＤ－１よりの出土で、田戸下層式の土器片である。４は爪形文と沈線を、５は沈線と貝殻腹縁文を、６は太い沈線と貝殻腹縁文を、７は太い沈線を、８は沈線による綾杉文を、９は細い沈線を施文している。また５は、胎土に微量の繊維を混入させている。10はＳＫ－２よりの出土で、田戸下層式の土器片で太い沈線を施文している。11～13はＳＫ－５よりの出土で、田戸下層式の土器片であり11は外面に条痕文が見られるが、内面には見られない。12・13は沈線を施文しているが、12は太い沈線で13は細い沈線である。14～18と20～22はＳＫ－６よりの出土で、14～17・20～22は田戸下層式であり18は浮島Ⅲ式である。14は沈線と、単節LRの細縄文とを組み合わせて施文している。15は細沈線を施文しており、16と17は細沈線と貝殻腹縁文を施文している。18は口縁部に刻み目と、外面に三角形の刺突文を施文している。20と22は沈線と貝殻腹縁文を、21は沈線と爪形文を施文しており、22は胎土に微量の繊維を含んでいる。19・23～25はＳＫ－７よりの出土で、浮島Ⅱ・Ⅲ式の土器片である。19は口縁部に刻み目を有し、外面に連続刺突文を施文する浮島Ⅲ式であり、23は半裁竹管による沈線を施文しており、24は沈線と横位と斜位との三角形刺突文を施文しており、25は平行する三角形刺突文を施文している。26と27はＳＫ－８より出土で、田戸下層式の土器片である。26は太い沈線と細い沈線とを組み合わせており27は外面に条痕文が見られる。28～34はＳＫ－10よりの出土で、28は斜位の細い沈線と縦位の太い沈線とが施文されている。29～33は沈線が施文されており、33には補修孔がある。34は沈線と貝殻腹縁文が施文されている。28は三戸式で30～34は田戸下層式である。35・36はＳＫ－11よりの出土で、田戸下層式の土器片である。35は細沈線と貝殻腹縁文を施文しており、36は外面に条痕文を施文している。また36は胎土に微量の繊維を含んでいる。38は炉跡３よりの出土で、横位の爪形文と沈線が施文されている田戸下層式の土器片である。39は炉跡４よりの出土で、ハイガイの殻頂部による背圧痕と沈線を施文しており、胎土に微量の繊維を含んでいる。田戸下層式である。40～44は当遺跡覆土とローム面よりの遺物で

第3表 出土遺物一覧表 1 （師器・須恵器・石製品）

NO	出土遺構	名称	法量（cm） 現高	口径	底径	台径	孔	位置	胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴
1	第1号住	須恵器・盤	3、8×3、7	17、5×17、3	12、3	11、2		+30	明灰褐色	良好	明灰褐色	体部内外ロクロ整形、底面回転ヘラ切り後ヘラナデ、長石含む
2		須恵器台付坏	6、8	推16、8	14、4	11、8×11、3		+25	灰褐色	良好	灰褐色	体部内外ロクロ整形下端ヘラオデ、高台下端外開き、接合資料
3		須恵器坏蓋	3、1	16、6×16、4				床面	明灰褐色	良好	明灰褐色	体部上半回転ヘラ削りヘラナデ下半ロクロ整形、口縁薄く垂直
4		紡錘車	0、9	上面径 2、8		重さ g	0、8	+27			淡黒色	1/2程を欠損している
5		土師器・甕	15、0	推 15、0	8、8			カマド内	粗い	良好	明黒色	1/3程残、体部ヘラナデ中半以下ヘラ削り、口縁部が肥厚
6		須恵器台付坏	3、2		13、0	10、0×9、7		カマド内	灰褐色	良好	灰褐色	体部内外ロクロ整形、底面回転ヘラ削りヘラナデ、高台外開き
7	第2号住	土師器・甕	33、5	22、2×21、2	10、0			床面	緻密	良好	明茶褐色	完形でやや歪、体部ヘラ削りヘラナデ下半ヘラナデ、木葉痕有り
8		土師器・甕	22、0	推 25、0				床面	粗い	良好	暗茶褐色	1/5程残、口縁部ナデ、体部外面摩滅内面ヘラナデ
9		須恵器坏蓋	4、7	推 17、6				+22	緻密	良好	灰褐色	摘みはヘラナデ、体部ロクロ整形、摘み径1、6×2、7cm
10		土師器・甕	22、0	推 24、0				+22	粗い	良好	明褐色	接合資料、口縁～体部ヘラナデ、口縁部は薄い器厚で直立
11		須恵器坏蓋	3、6	15、7				カマド内	緻密	良好	明灰褐色	体部上半回転ヘラ削り下半ロクロ整形、摘み3、0×1、2cm

第4表 出土遺物一覧表 2 （縄文式土器）

NO	出土遺構	器形	成・整形の特徴	型式	色調	焼成	胎土・他
1	第 6号住	深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	悪	一括遺物、やや脆く、砂粒・長石・雲母を含む
2	第 8号住	深鉢胴部	沈線	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
3		深鉢胴部	棒状工具により施文	安行Ⅰ式	黒灰色	良好	砂粒
4	第 1号溝	深鉢胴部	幅広の集合沈線による緩やかな弧状の文様	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
5		深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒、微量の繊維を含む
6		深鉢胴部	太い沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	橙色	良好	砂粒
7		深鉢胴部	太い沈線	田戸下層	赤褐色	良好	砂粒
8		深鉢胴部	沈線を綾杉状に施文	田戸下層	灰褐色	良好	砂粒
9		深鉢胴部	細い沈線	田戸下層	淡赤褐色	良好	砂粒
10	第 2号土	深鉢胴部	太い沈線	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
11	第 5号土	深鉢胴部	外面に条痕文が見られるが、内面にはない	田戸下層	赤褐色	悪	やや脆く砂粒を含む
12		深鉢胴部	太い沈線	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
13		深鉢胴部	細い沈線	田戸下層	赤褐色	良好	砂粒
14	第 6号土	深鉢胴部	沈線と単節LRの細縄文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
15		深鉢口縁	細い沈線	田戸下層	赤褐色	良好	やや黒い色調で、砂粒含み
16		深鉢胴部	細沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
17		深鉢胴部	細沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
18		深鉢口縁	口縁部に刻み目、外面には三角文を施文	浮島Ⅲ式	淡褐色	悪	やや脆く砂粒を含む
19	第 7号土	深鉢口縁	口縁部に刻み目、外面には三角文を施文	浮島Ⅲ式	淡褐色	良好	砂粒
20	第 6号土	深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文を綾杉状に施文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
21		深鉢口縁	沈線と爪形文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
22		深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	黒灰色	良好	微量の繊維と砂粒を含む

第5表 出 土 遺 物 一 覧 表 3 （縄文式土器・石鏃）

NO	出土遺構	器　形	成・整形の特徴	型　式	色 調	焼成	胎　土・他
23	第 7号土	深鉢胴部	半裁竹管による沈線	浮島ⅡかⅢ	淡赤褐色	良好	砂粒
24		深鉢胴部	沈線と平行する三角形の刺突列を施文	浮島ⅡかⅢ	淡赤橙色	悪	やや脆く、砂粒を含む
25		深鉢胴部	平行する三角形の刺突	浮島Ⅲ式	淡赤橙色	悪	やや脆く、砂粒を含む
26	第 8号土	深鉢胴部	太い沈線と細い沈線	田戸下層	橙　色	良好	長石、砂粒
27		深鉢胴部	外面にのみ条痕文有り	田戸下層	淡黒灰色	良好	砂粒
28	第10号土	深鉢胴部	太い沈線と細い沈線	三戸式	淡褐色	良好	長石、砂粒を含む
29		深鉢胴部	太い沈線で鍛杉状の文様を施文	田戸下層	淡赤褐色	良好	砂粒
30		深鉢胴部	太い沈線	田戸下層	淡赤褐色	良好	砂粒
31		深鉢胴部	細い沈線	田戸下層	赤褐色	良好	砂粒
32		深鉢胴部	中程度の沈線	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
33		深鉢胴部	太い沈線、補修孔有り	田戸下層	淡黒灰色	良好	長石、砂粒を含む
34		深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
35	第11号土	深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
36		深鉢胴部	外面にのみ条痕文有り	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒、微量の繊維を含む
37		深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡灰褐色	良好	砂粒
38	炉跡３	深鉢口縁	爪形文と沈線	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
39	炉跡４	深鉢口縁	ハイガイの殻頂部による背圧痕と沈線	田戸下層	淡黒灰褐色	良好	砂粒、微量の繊維を含む
40	遺跡一括	深鉢胴部	中程度の沈線	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
41		深鉢胴部	太い沈線	田戸下層	赤褐色	良好	砂粒
42		深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡灰褐色	良好	砂粒、微量の繊維を含む
43		深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
44		深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
45	不明遺構1	深鉢口縁	口縁部に刻み目と外面には爪形文と沈線	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
46		深鉢胴部	外面にのみ条痕文有り	田戸下層	淡赤褐色	良好	砂粒、微量の繊維を含む
47		深鉢胴部	三角文	浮島Ⅲ式	淡赤褐色	良好	砂粒
48	不明遺構2	深鉢口縁	細沈線と単節ＬＲの細縄文を施文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
49		深鉢胴部	沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	暗褐色	良好	長石、砂粒を含む
50		深鉢胴部	外面にのみ条痕文有り	田戸下層	褐　色	悪	やや脆く、砂粒と微量の繊維を含む
51		深鉢胴部	細沈線と貝殻腹縁文	田戸下層	黒灰色	良好	砂粒、補修孔有り
52		深鉢胴部	平行する三角形の刺突	浮島Ⅲ式	橙　色	良好	砂粒
53		深鉢胴部	太い沈線	田戸下層	淡赤褐色	良好	砂粒
54		深鉢口縁	口縁に刻み目と外面に沈線を施文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
55		深鉢胴部	深めの沈線	田戸下層	淡黒褐色	良好	砂粒
56		深鉢胴部	貝殻腹縁文	田戸下層	淡褐色	良好	砂粒
57		深鉢胴部	外面にのみ条痕文有り	田戸下層	淡黒褐色	良好	砂粒、微量の繊維を含む
58	第10号土	石　鏃	無　茎	全長 3、5cm	幅 1、6cm	厚さ0、4cm	石質 チャート

あり、40は中程度の沈線で、41は太い沈線を施文している。42～44は、沈線と貝殻腹縁文を施文してい

る。また42は、胎土に微量の繊維を含んでいる。田戸下層式である。45～47は不明遺構（ＳＸ－１）よりの出土で、45・47は田戸下層式であるが48は浮島Ⅲ式である。45は口縁部に刻み目を有し、外面に爪形文と沈線とを組み合わせて施文している。46は外面にのみ条痕文をが見られ、胎土に微量の繊維を含んでいる。47は三角文施文している。48～57は不明遺構２（ＳＸ－２）よりの出土で、48～51と53～57は田戸下層式で52が浮島Ⅲ式である。48は細い沈線と単節LRの細縄文とを組み合わせており、49が沈線と貝殻腹縁文とを組み合わせて施文している。50は外面にのみ条痕文を施文し、51は沈線と貝殻腹縁文を施文しており、補修孔が見られる。52は平行する三角形の突刺列で、三角文を構成している。53は太い沈線で、54は沈線と口縁部に刻み目との組み合わせである。55は斜めに深めの沈線を施文しており、56は貝殻腹縁文を施文している。57は外面にのみ条痕文が見られる。また50と57は、胎土に微量の繊維を含んでいる。58はＳＫ－10より出土したチャート質の石鏃で、無茎である。

Ⅵ　ま　と　め

今回調査した喜平台南遺跡の調査結果は、いままで報告した通りである。遺跡としては、縄文時代より奈良・平安時代が中心の遺跡である。

縄文時代の遺構は、住居跡・土坑・陥し穴・炉跡が発見されている。住居跡は、炉跡と柱穴で認められており円形・楕円形状を呈する住居跡で、調査区の北東部と中央部とに集中する傾向を有している。個々の住居跡は各々差異を有しており、ＳＩ－４のように小型の住居跡やＳＩ－８・10のような大型の住居跡も発見されている。土坑・陥し穴としては、陥し穴が調査区の東側に南～北にかけ主軸を東西に有して掘り込まれているが、北側から２基づつのグループに分類されるようである。このことは、陥し穴を掘り込んだ時期が異なることを示すことと判断される。出土遺物としては、田戸下層式・浮島Ⅱ式・Ⅲ式等の土器片が出土しているが、田戸下層式の土器片が中心であることから縄文時代早期中葉後半期に位置していることと判断される。

奈良・平安時代の遺構としては、２件の住居跡が発見されたのみである。住居跡の細部では異なっているが、ＳＩ－１は４ｍ代の規模でＳＩ－２は３ｍ代の規模を有することは、時期的な差を示す点である。またＳＩ－２からは、カマドの東側に土師器甕が0.14ｍ程埋設された状況で出土している。遺物の出土状況としては、住居跡廃棄後の流入を示している。出土遺物は、土師器坏・甕・須恵器坏・高台付坏・盤・紡錘車が出土している。これらの遺物から２軒の住居跡は、８世紀後半から９世紀前半頃の住居跡と判断される。また２軒の住居跡は、調査区北側畑の西側にある埋没谷の辺縁部に立地しているようである。

不明遺構であるが、ＳＫ－11の調査時に発見した遺構で、遺構確認面のローム面より0.55～1.50ｍ下位でローム層内にトンネル状に掘り込まれており、軟質な茶褐色土が縄文式土器を含んで充満していることから、動物が掘り込んだ穴と推定される。縄文式土器は土坑に伴う遺物と推定されるが、確実な点は不明であることから不明遺構として報告した。

今回実施した調査結果から、住居跡・土坑は調査区北側の畑部分にも同時期の遺構が存在することと判断され、奈良・平安時代の集落の中心が存在することと推定される。喜平台南遺跡は、今回の調査区と北側畑の部分を含む広い遺跡で有ることと推定される。

Ⅶ　報　告　書　抄　録

ふりがな	いばらぎけんなめかたぐんあそうまち　きへいだいみなみいせきちょうさほうこくしょ		
書名	茨城県行方郡麻生町喜平台南遺跡調査報告書		
副書名			
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	関川　宏・藤原　　均・荒井秀樹	編集	麻生町喜平台南遺跡調査会 (0299-72-0811)
発行機関	麻生町教育委員会		
所在地	茨城県行方郡麻生町麻生１５６１－９		常総考古学研究所(090-8648-3867)
発行年月日	平成１４年９月		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東径	調査期間	調査面積	調査の原因
きへいだいみなみ 喜平台南 いせき 遺跡	いばらぎけんなめかたぐん 茨城県行方郡 あそうまちしまなみ 麻生町島並	４２１	１１８	36° 1′ 21″	140° 29′ 0″	平成13年 7月～ 平成13年 9月	3,000 ㎡	土採取

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜平台南遺跡	集落	縄文時代 奈良時代 平安時代 中・近世	住居跡 土坑 溝 不明遺構	土師器 甕・坏 須恵器 高台付坏・坏蓋 盤 紡錘車 縄文式土器・石鏃	標高３３ｍ代の台地上で、住居跡に土師器甕が埋設されており縄文時代の遺物としては田戸下層式の土器が多い

参考文献

『麻生町史・通史編』　麻生町史編纂委員会　　平成14年２月

『麻生の遺跡』　麻生町教育委員会　１９９７年３月

『房総考古学ライブラリー　縄文時代(1)』　（財）千葉県文化財センター　昭60年

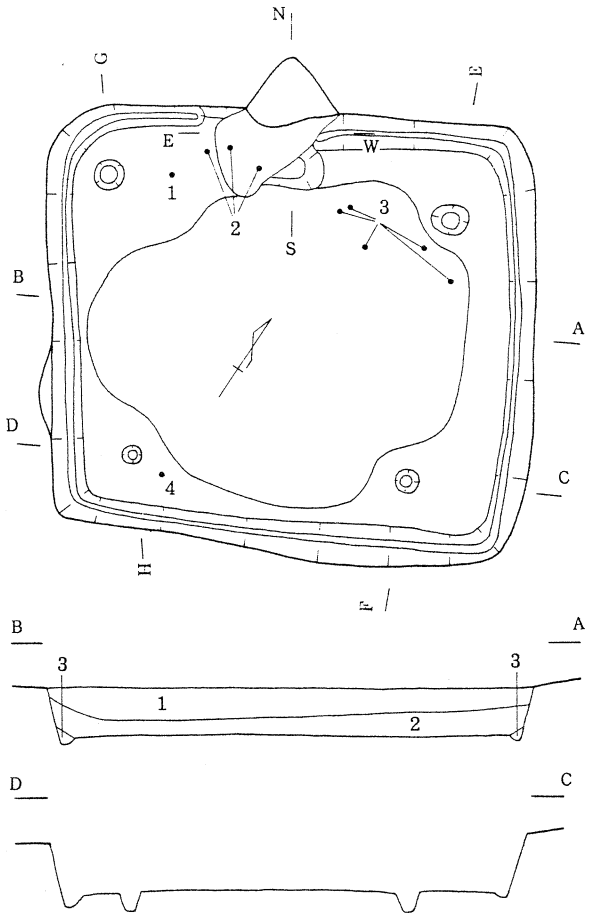
『茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ｉ）』　研究ノート創刊号
㈶茨城県教育財団　平成３年

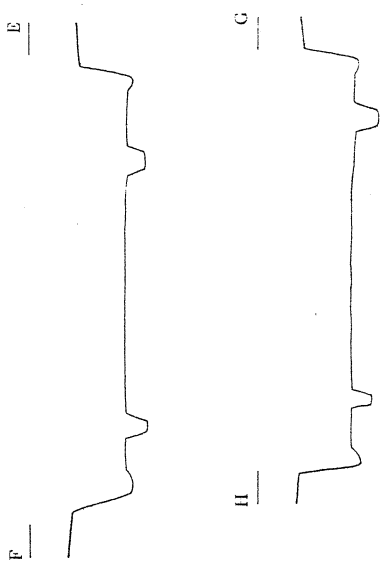
「石畑遺跡」　茨城県猿島郡五霞村教育委員会　　1977年３月

「二本木城跡調査報告書」　麻生町二本木城跡調査会　平成３年３月

「赤松遺跡発掘調査報告書」　麻生町教育委員会　１９９３

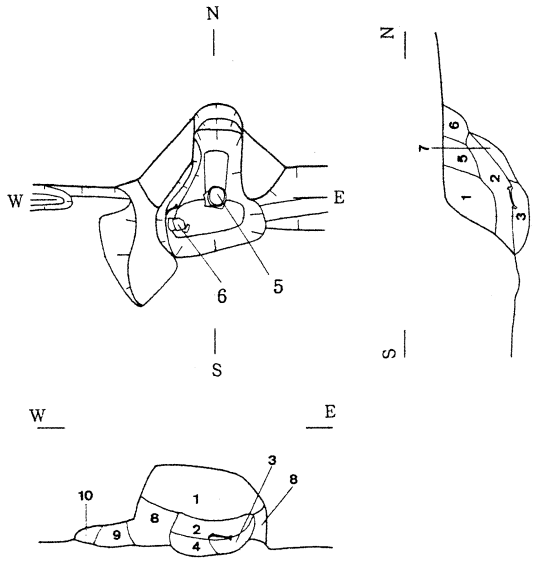
「秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚」　江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会　　１９９９





住 居 跡 土 層 凡 例

1）、暗明褐色土（ローム粒、ローム小ブロックを含む）
2）、暗明褐色土（ローム小ブロックとローム粒を含む、1層より暗い）
3）、暗明褐色土（少量の焼土ブロック、粘土粒子、ローム粒子を含む）

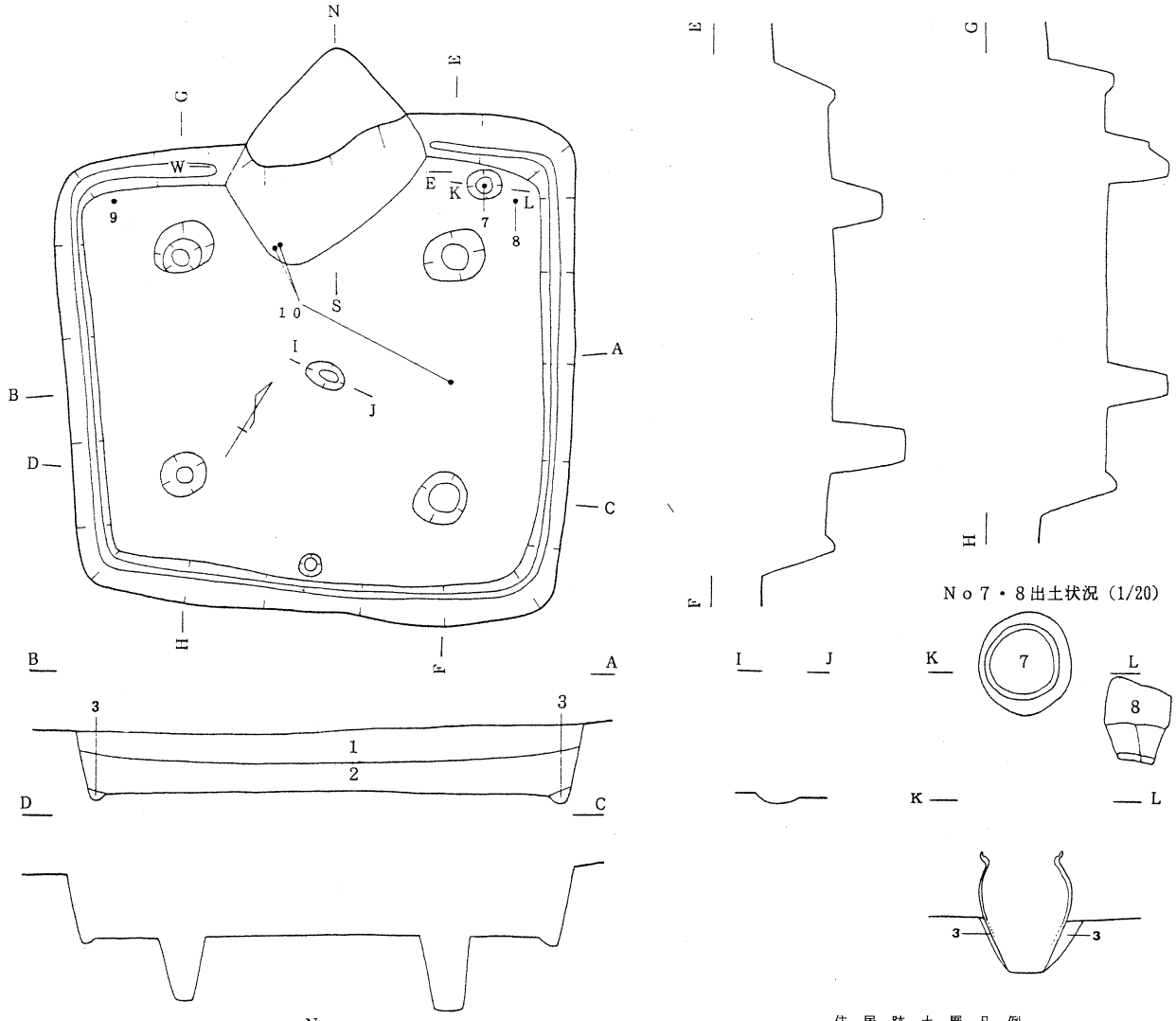


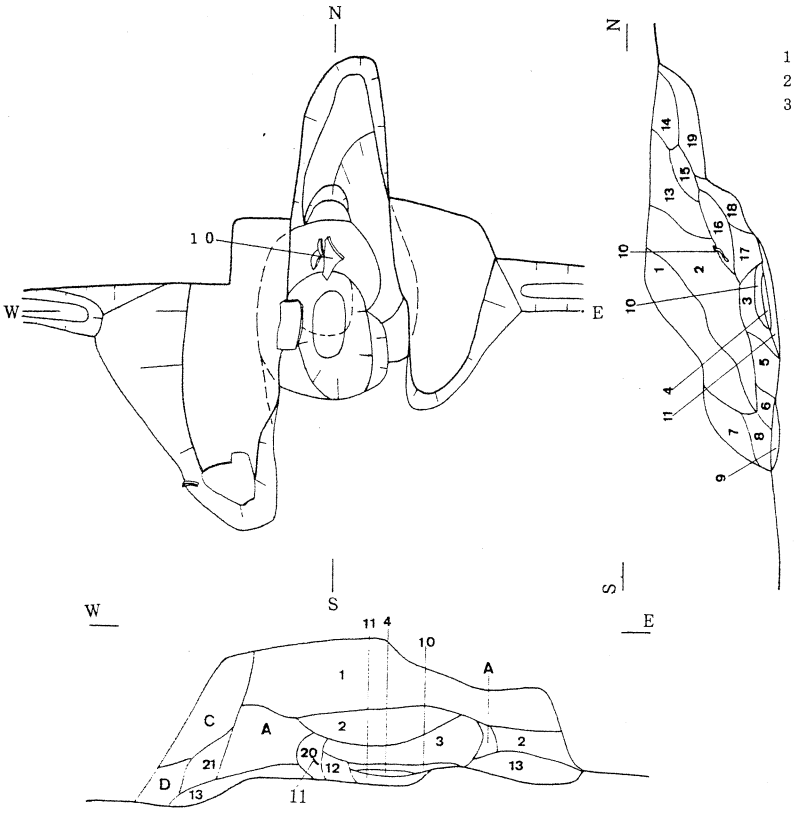
カ マ ド 土 層 凡 例

1）、暗褐色土　（砂質、砂粒と粘土粒子を含む、硬質）
2）、暗黒褐色土（焼土粒子を含む、くすみ軟質）
3）、暗黒褐色土（焼土ブロックを含む、くすみ軟質）
4）、黄褐色土　（ロームブロックと少量の焼土粒子を含む）
5）、暗褐色土　（砂質、ごく少量の炭化物と焼土を含む、硬質）
6）、暗褐色土　（砂質、焼土粒子と炭化物を含む、くすむ）
7）、黄褐色土　（ごく少量の焼土粒子と炭化物を含む、くすむ）
8）、暗褐色土　（ローム粒、ローム小ブロック、砂質粘土粒を含む、硬質）
9）、黄褐色土　（ローム粒、ローム小ブロックを含む、硬質）
10）、暗茶褐色土（ローム粒子と焼土粒子を含む）

第 4 図　第 1 号 住 居 跡（S I－1）実 測 図

（平面～1：60・カマド～1：30；L＝34.00m）





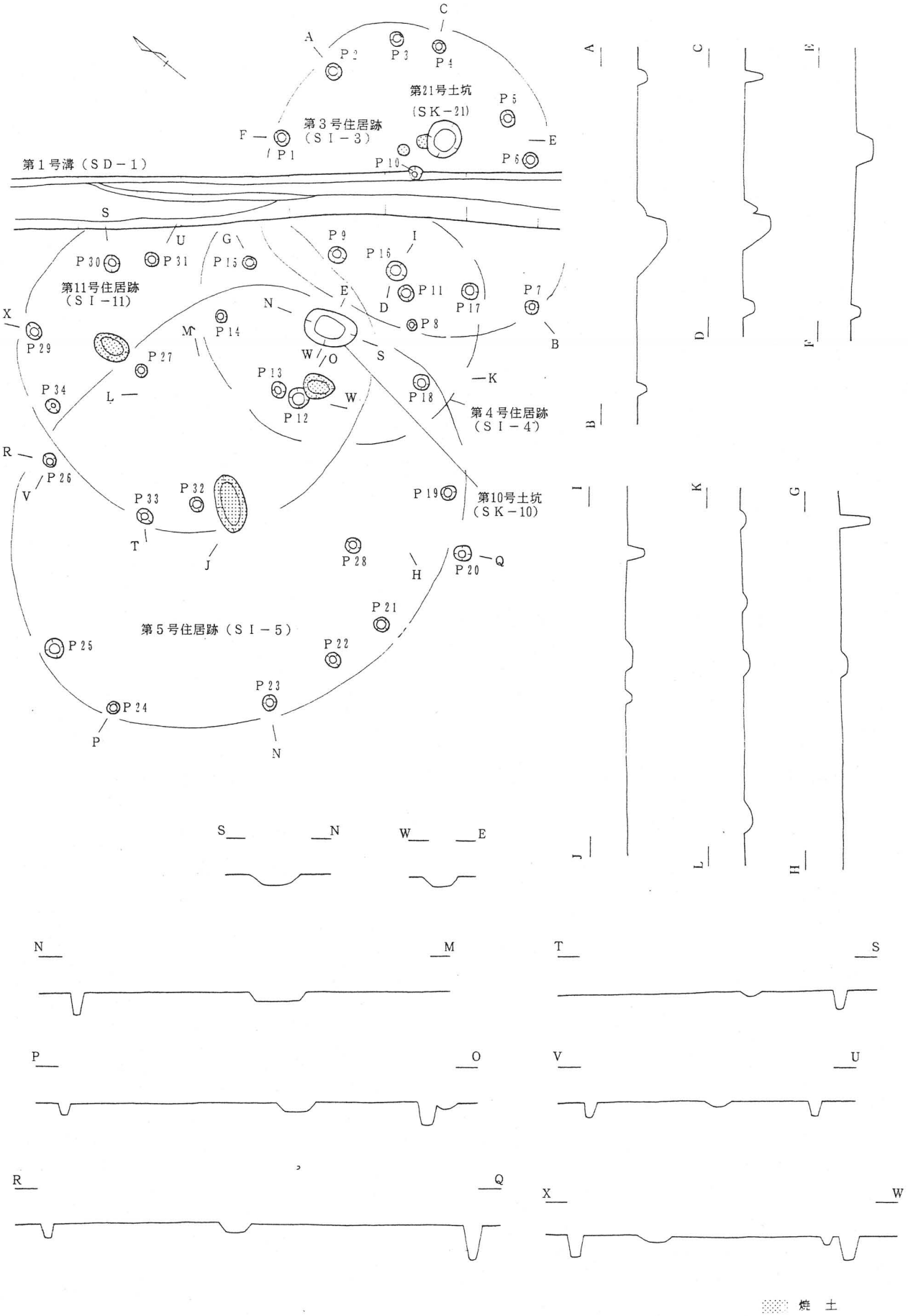
住居跡土層凡例

1）、暗明褐色土（ローム粒、ローム小ブロックを含む）
2）、暗明褐色土（ローム小ブロックとローム粒を含む、1層より暗14い）
3）、暗明褐色土（少量の焼土ブロック、粘土粒子、ローム粒子を含む）

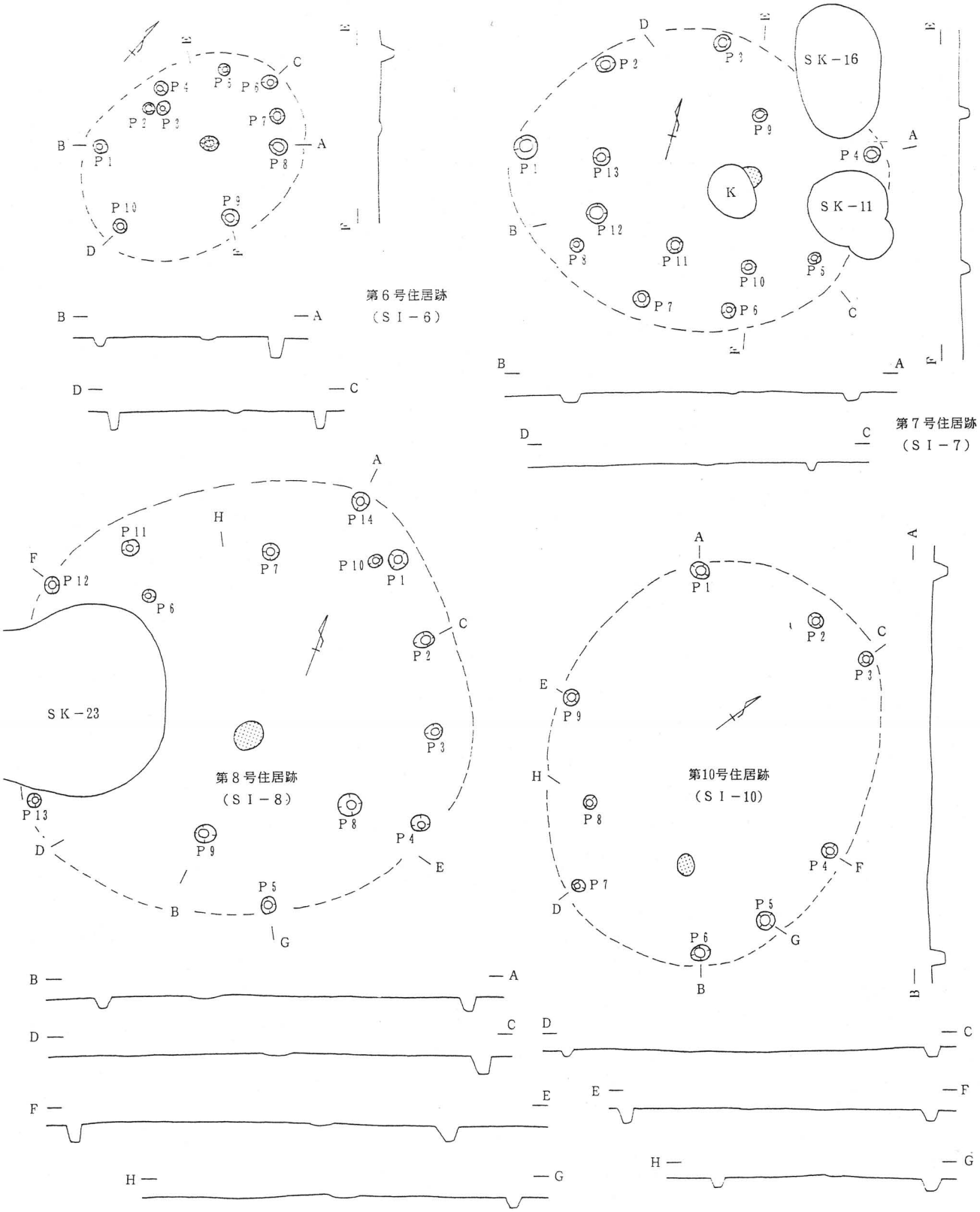
カマド土層凡例

1）、暗褐色土（砂質、砂粒と粘土粒子を含む、硬質）
2）、暗褐色砂質土（焼土ブロック、炭化物粒、を含む）
3）、暗褐色土（少量の焼土粒子を含む、）
4）、赤褐色土（焼土ブロックを含む）
5）、明黒褐色土（少量の焼土ブロックと焼土粒子を含む）
6）、暗褐色土（少量のローム粒子と焼土粒子を含む）
7）、暗褐色土（砂質粘土粒子を含む、硬質）
8）、暗褐色土（砂質粘土粒と土器粒子を含む、軟質）
9）、黄褐色土（ローム粒とロームブロックを含む）
10）、暗茶褐色砂質土（焼土粒子と焼土ブロックを含む）
11）、黄褐色土（ロームブロックを含む）
12）、暗黄褐色土（ロームブロック、ローム粒、焼土粒を含む
13）、暗黄褐色砂質粘土
14）、赤褐色土（焼土粒、焼土ブロックを含む）
15）、暗褐色土（ロ　ム粒子を含む、軟質）
16）、明黒褐色土（少量の焼土粒、焼土ブロックを含む、軟質）
17）、暗褐色土（ローム、ロームブロック、焼土粒を含む）
18）、暗褐色土（ロームブロック、ローム粒子を含む）
19）、黄褐色土（ロームブロックを含む）
20）、明黒褐色土（砂質、粘土粒子を含む、硬質）
21）、暗褐色砂質粘土
22）、黄褐色土
23）、暗茶褐色土（粘土粒子を含む）
24）、暗茶褐色土（少量のローム粒子含む）

第5図　第2号住居跡（SI－2）実測図（平面～1：60・カマド～1：30；L＝34.00m）

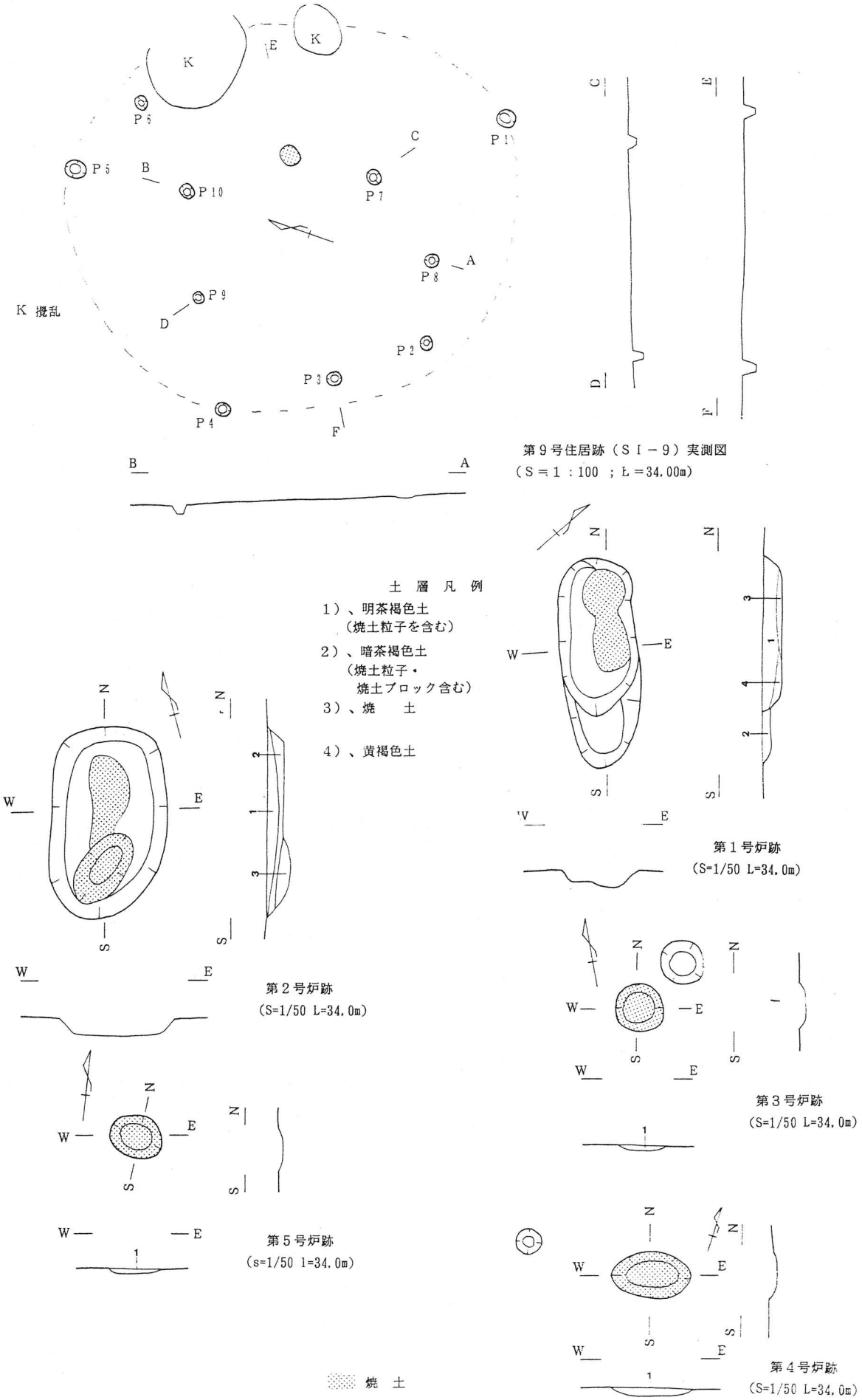


第 6 図　第 3・4・5・11号住居跡、第 10・21号土坑実測図
(SI−3・4・5・11、SK−10・21、L=34 0m、平面=1:100)

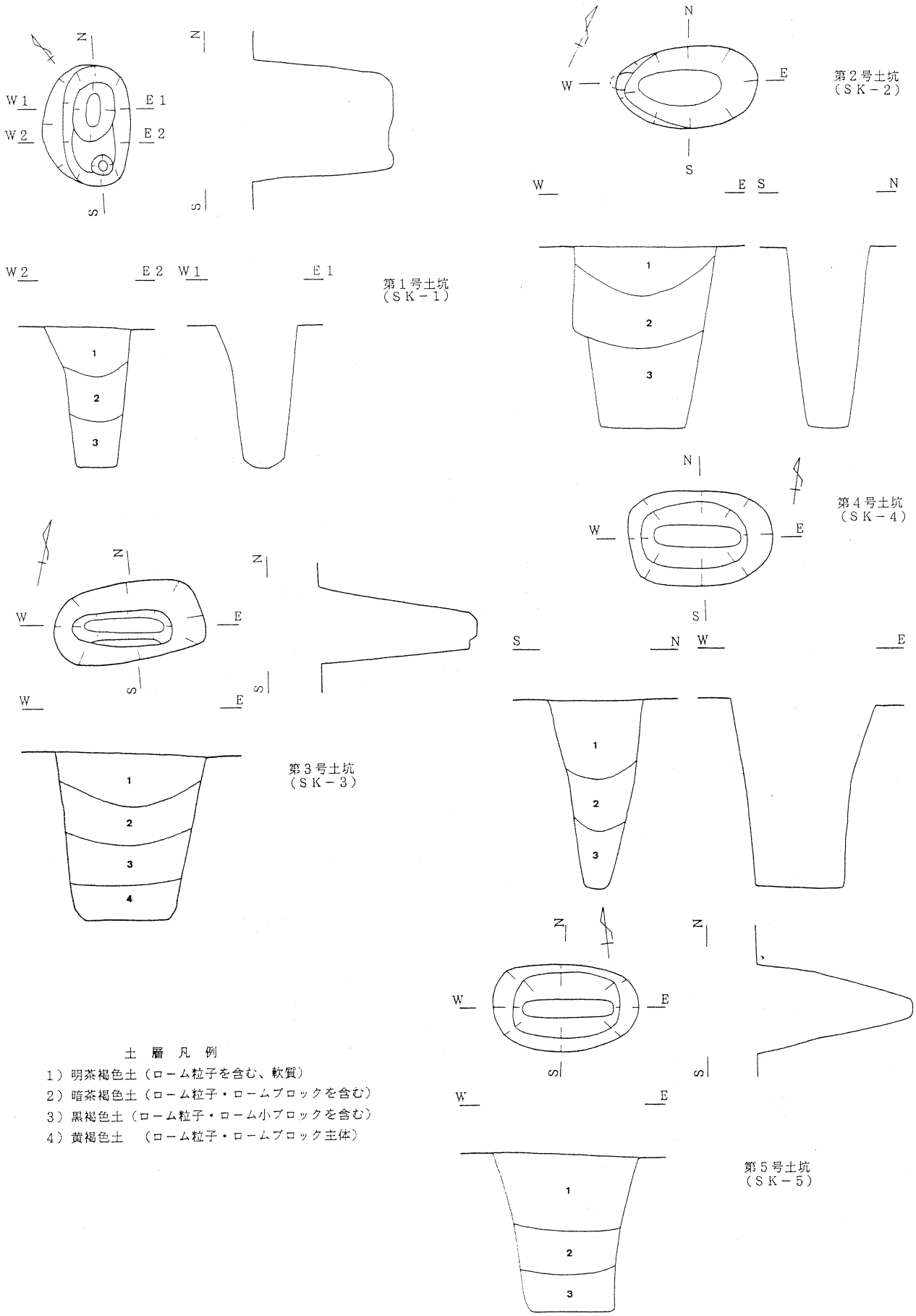


第７図　第６・７・８・10号住居跡（ＳＩ－６・７・８・10）実測図

（Ｓ＝１：100　Ｌ＝34.00m）



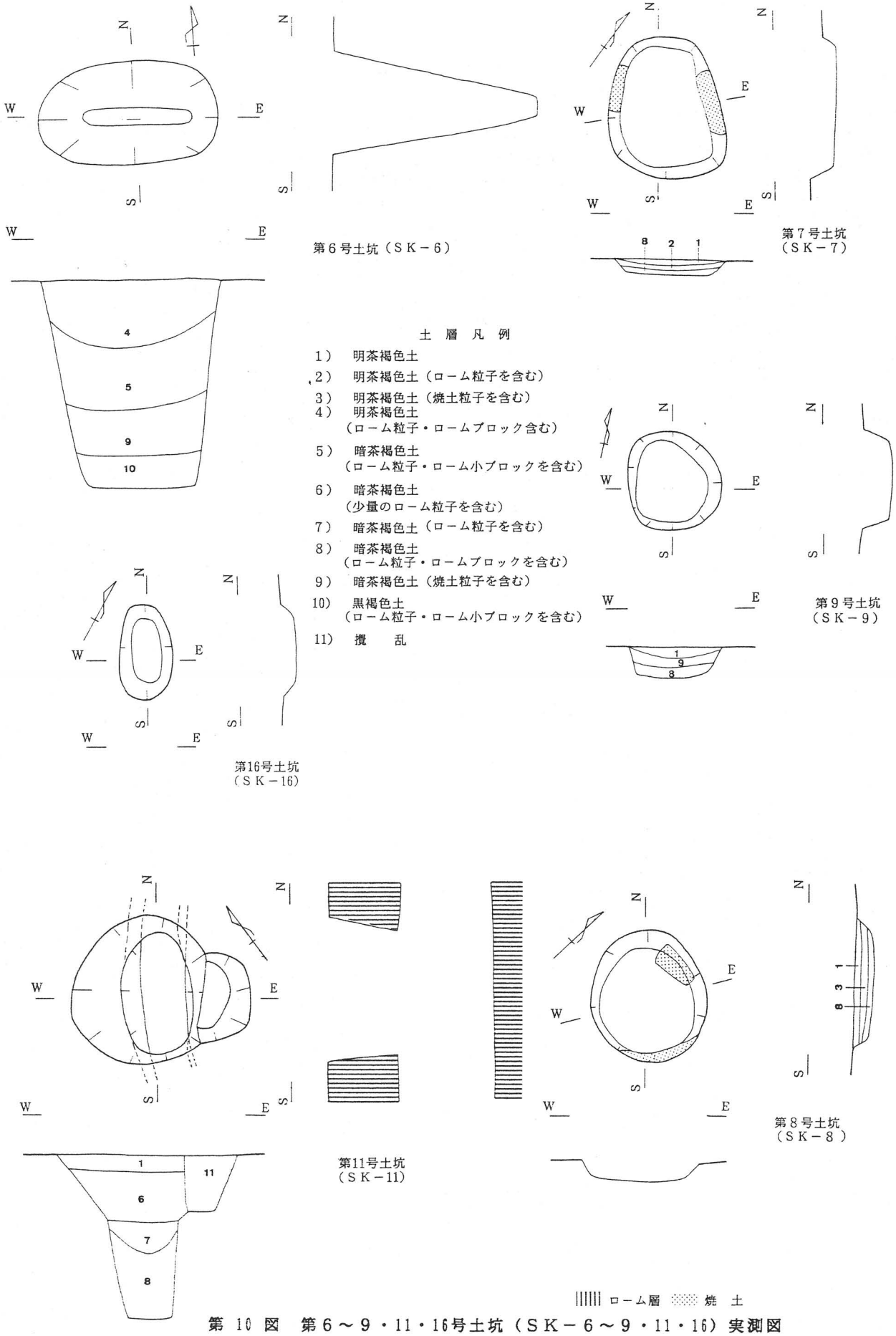
第８図　第９号住居跡（ＳＩ－９）、炉跡実測図



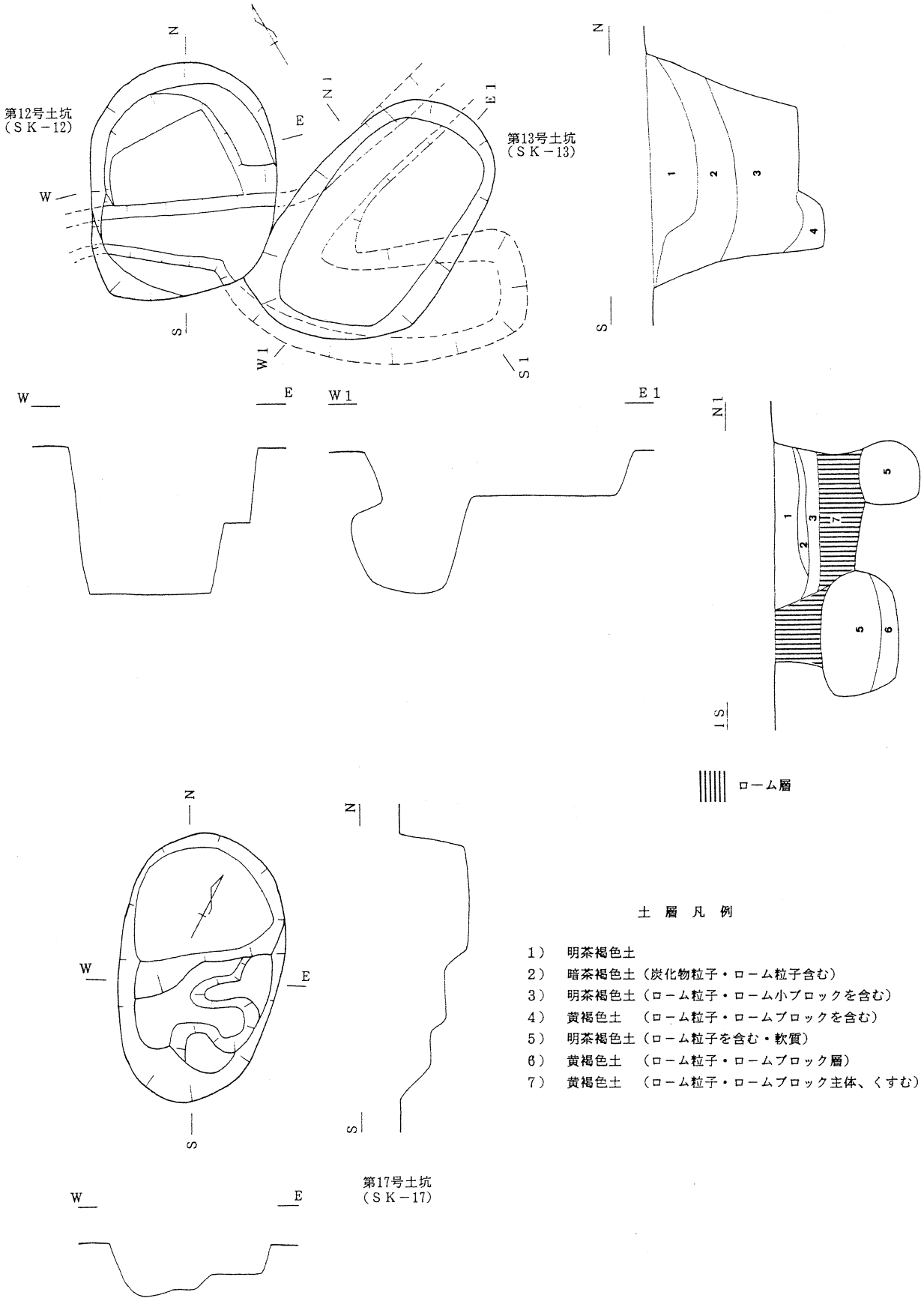
土　層　凡　例

1）明茶褐色土（ローム粒子を含む、軟質）
2）暗茶褐色土（ローム粒子・ロームブロックを含む）
3）黒褐色土（ローム粒子・ローム小ブロックを含む）
4）黄褐色土　（ローム粒子・ロームブロック主体）

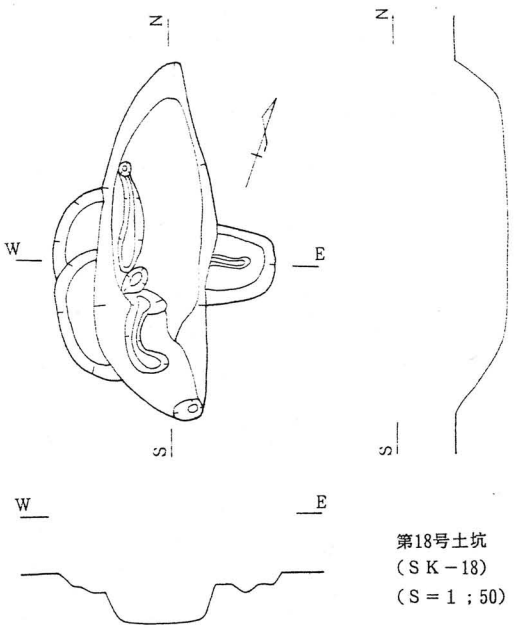
第９図　第１～５号土坑（ＳＫ－１～５）実測図　（Ｓ＝１：50、Ｌ＝34.00ｍ）



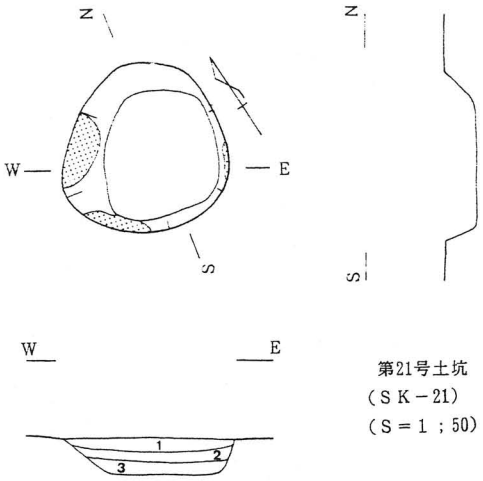
第 10 図 第６～９・11・16号土坑（ＳＫ－６～９・11・16）実測図
（Ｓ＝１：50、Ｌ＝34.00ｍ）



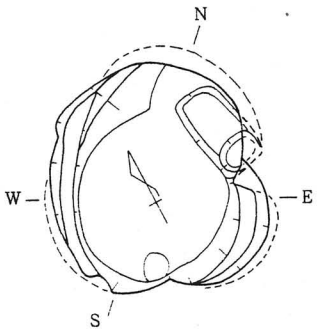
第 11 図 第 12 ・ 13 ・ 17 号 土 坑 （ＳＫ － 12 ・ 13 ・ 17）実 測 図
（Ｓ＝１：50 、Ｌ＝34.00ｍ）



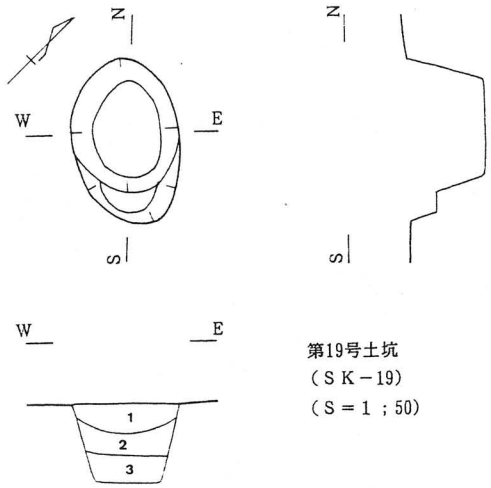
第18号土坑
（ＳＫ－18）
（Ｓ＝１；50）



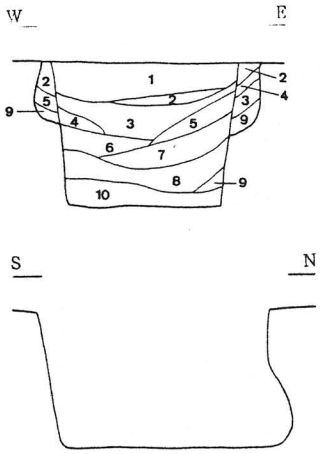
第21号土坑
（ＳＫ－21）
（Ｓ＝１；50）

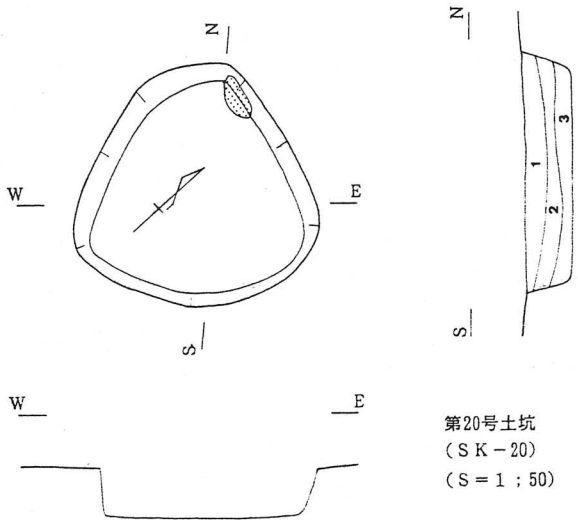


第14・15号土坑
（ＳＫ－14・15）
（Ｓ＝１；100）



第19号土坑
（ＳＫ－19）
（Ｓ＝１；50）





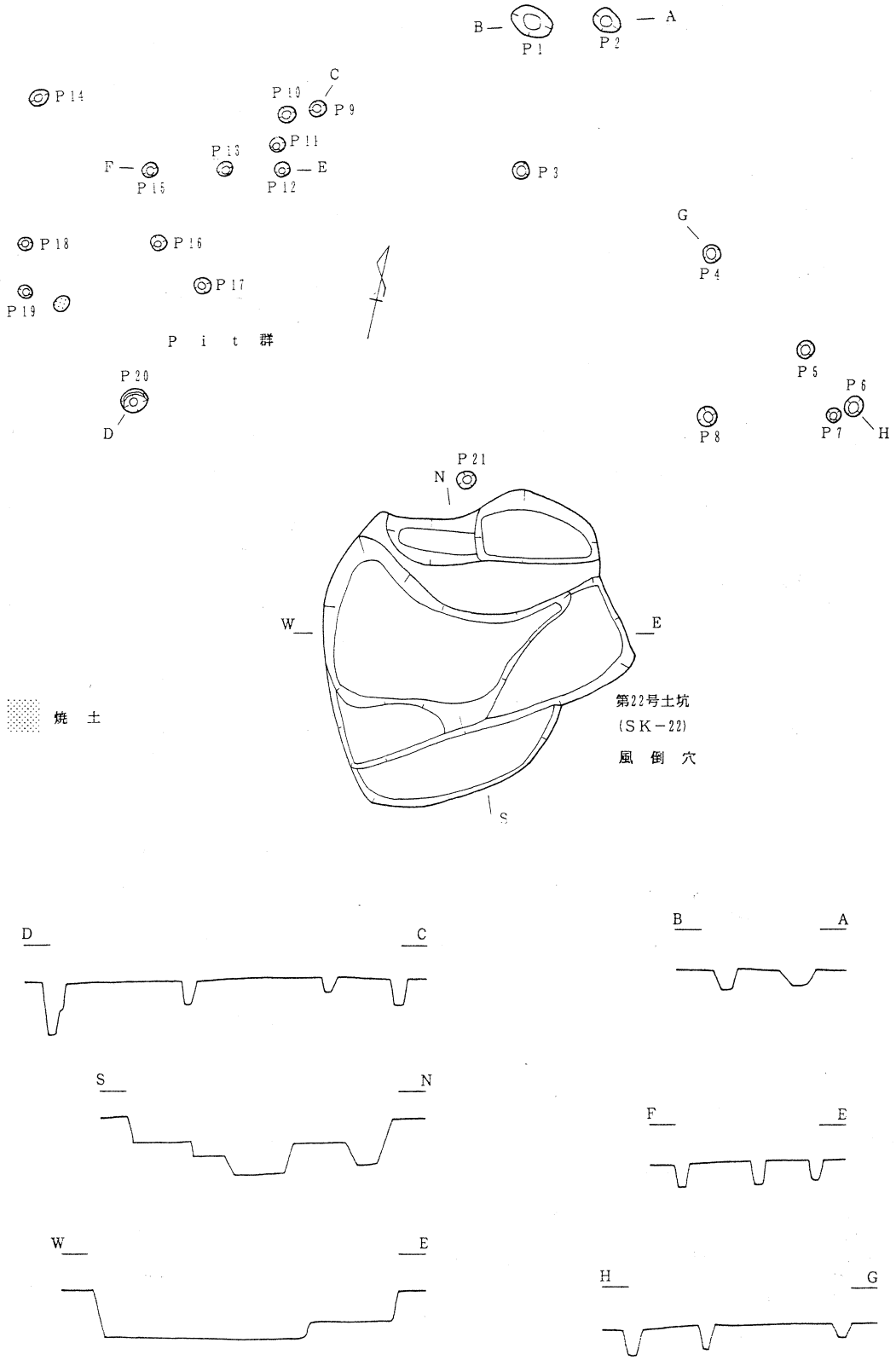
第20号土坑
（ＳＫ－20）
（Ｓ＝１；50）

土　層　凡　例

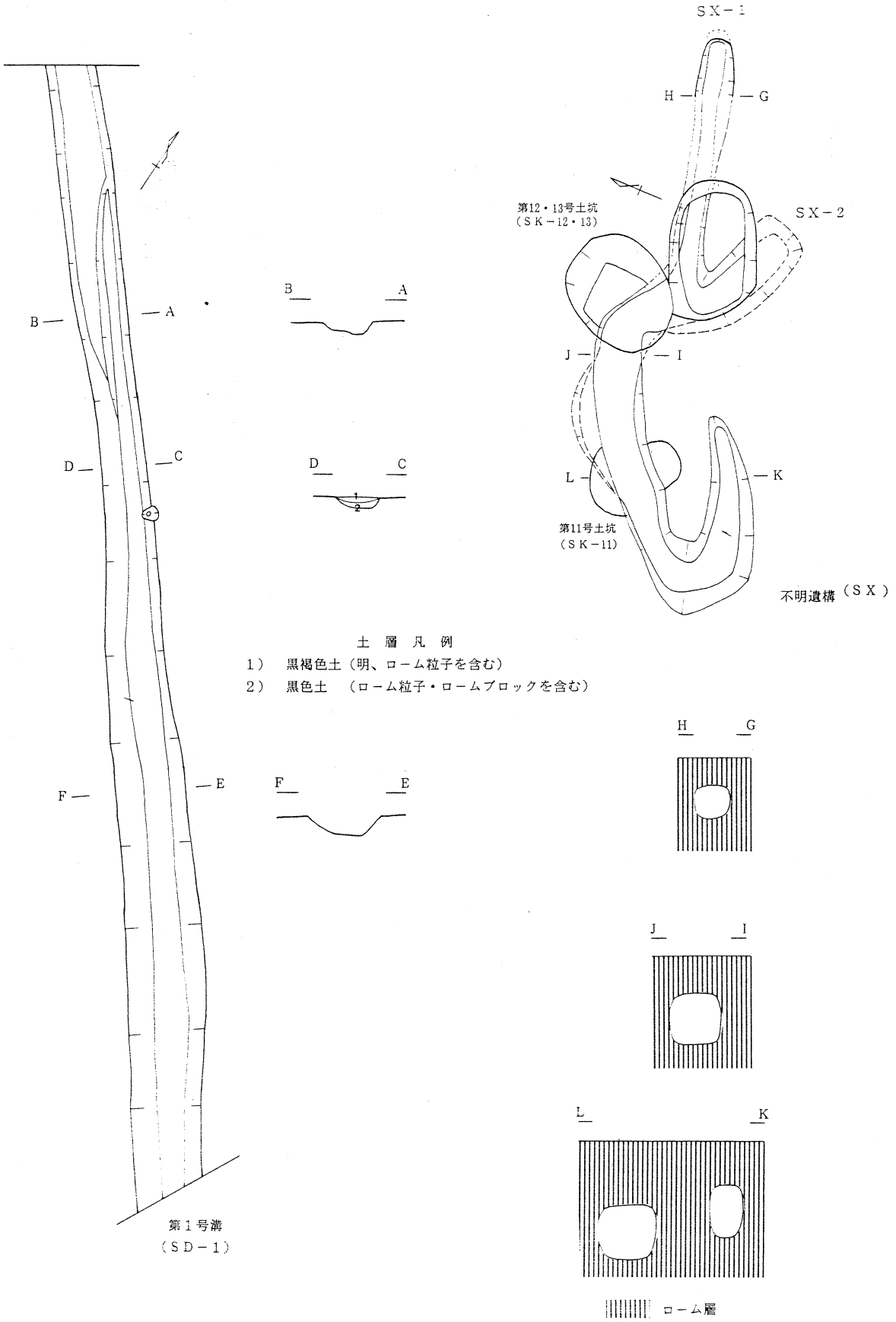
1）　明茶褐色土（ローム粒子・ロームブロックを含む）
2）　暗茶褐色土（ローム粒子・ロームブロック・炭化物を含む）
3）　暗茶褐色土（ロームブロック・炭化物を含む）
4）　明茶褐色土（ロームブロック含む）
5）　暗茶褐色土（ローム小ブロックを含む）
6）　黄褐色土　（ローム粒子・ロームブロック・炭化物を含む）
7）　黄褐色土　（ローム粒子・ロームブロックを含む）
8）　暗茶褐色土（ロームブロックを含む）
9）　黄褐色土　（ロームブロック・ローム粒子を含む）
10）　黄褐色土　（ローム粒子・ローム小ブロックを含む）
11）　明茶褐色土
12）　明茶褐色土（焼土粒子を含む）
13）　暗褐色土　（ローム粒子を含む）

焼　土

第 12 図　第14・15・18～21号土坑（ＳＫ－14・15・18～21）実測図（Ｌ＝34.00ｍ）

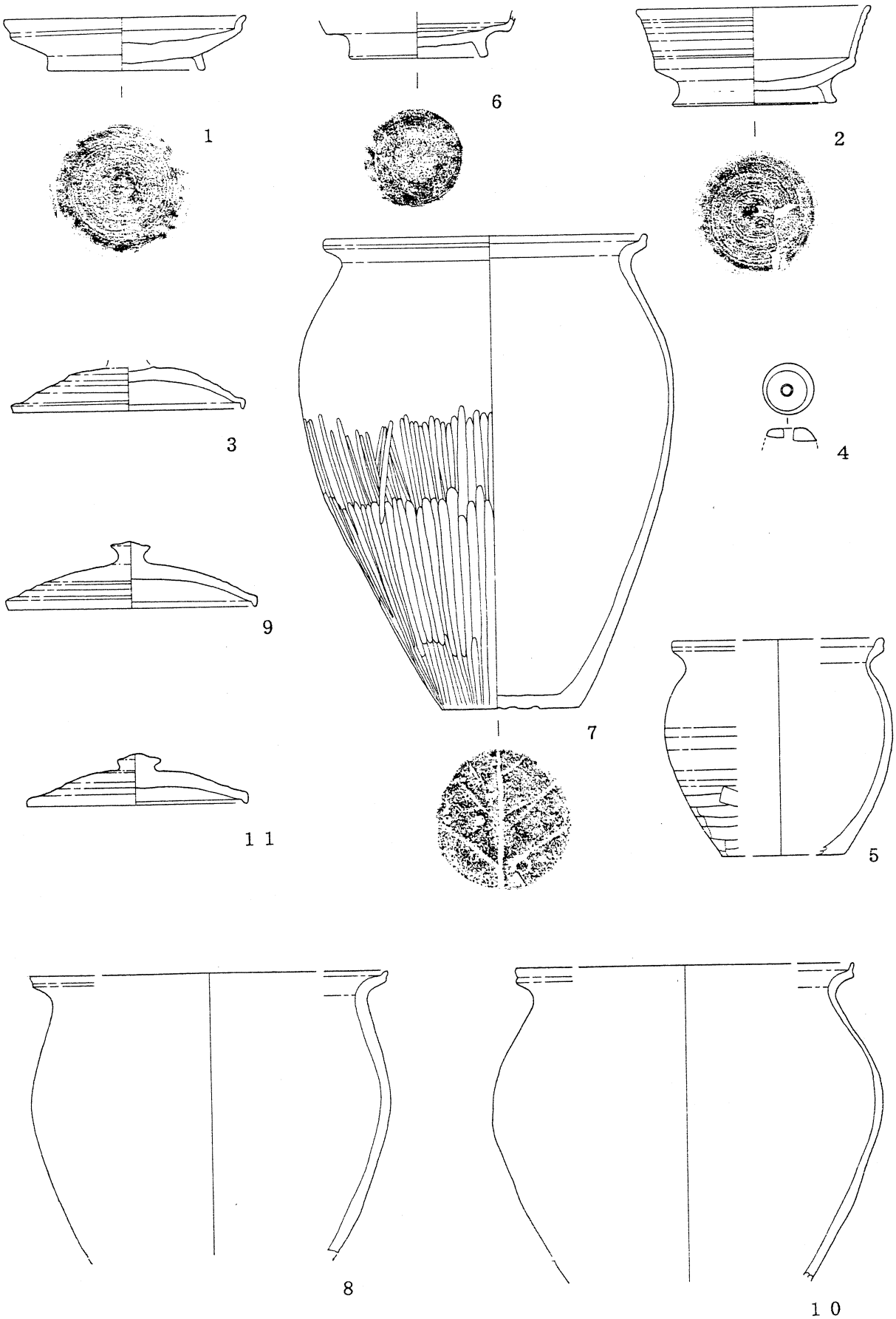


第13図　Pit群・風倒穴実測図（S＝1：100、L＝34.00m）

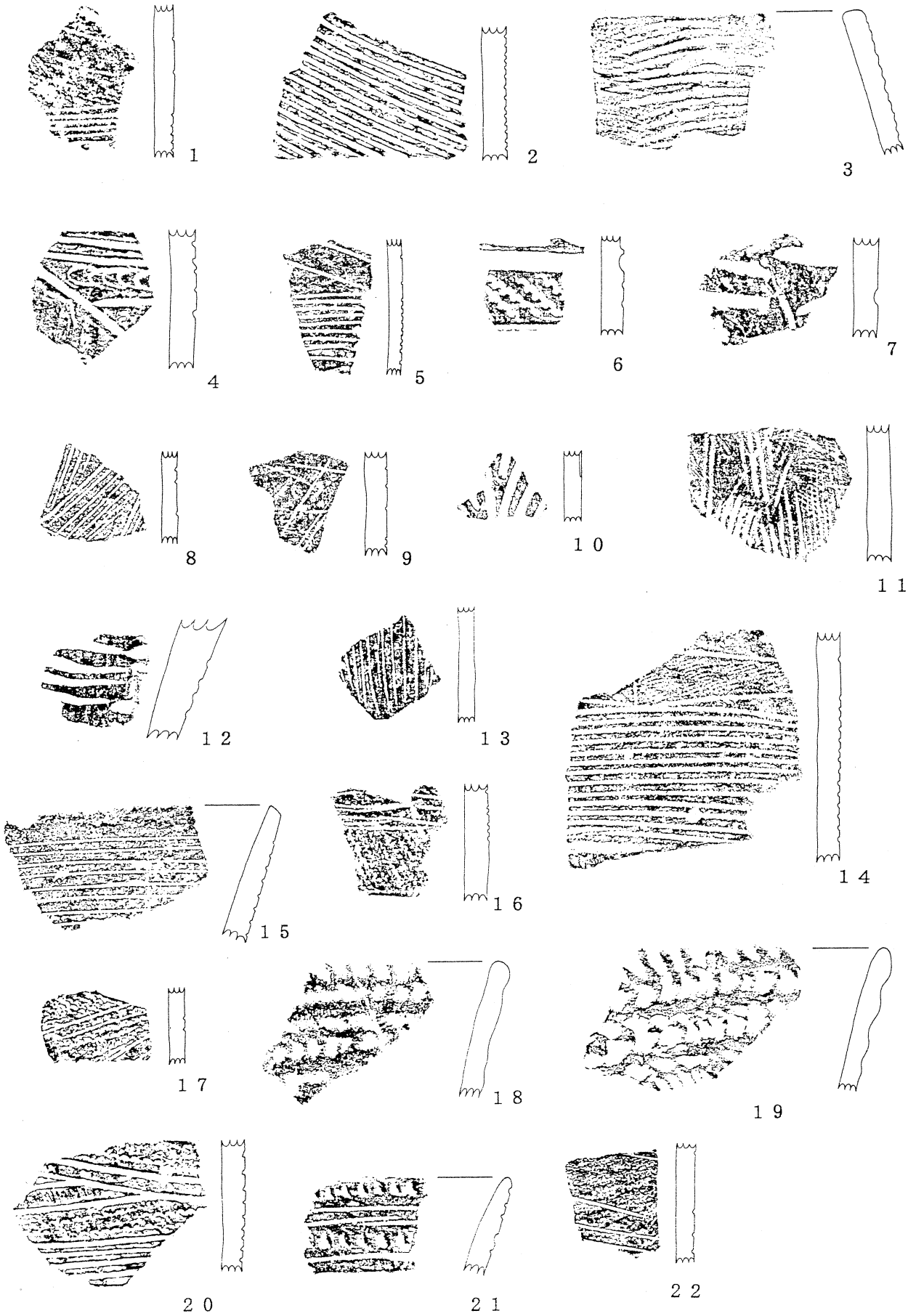


（S＝1：100 、L＝34.00m）

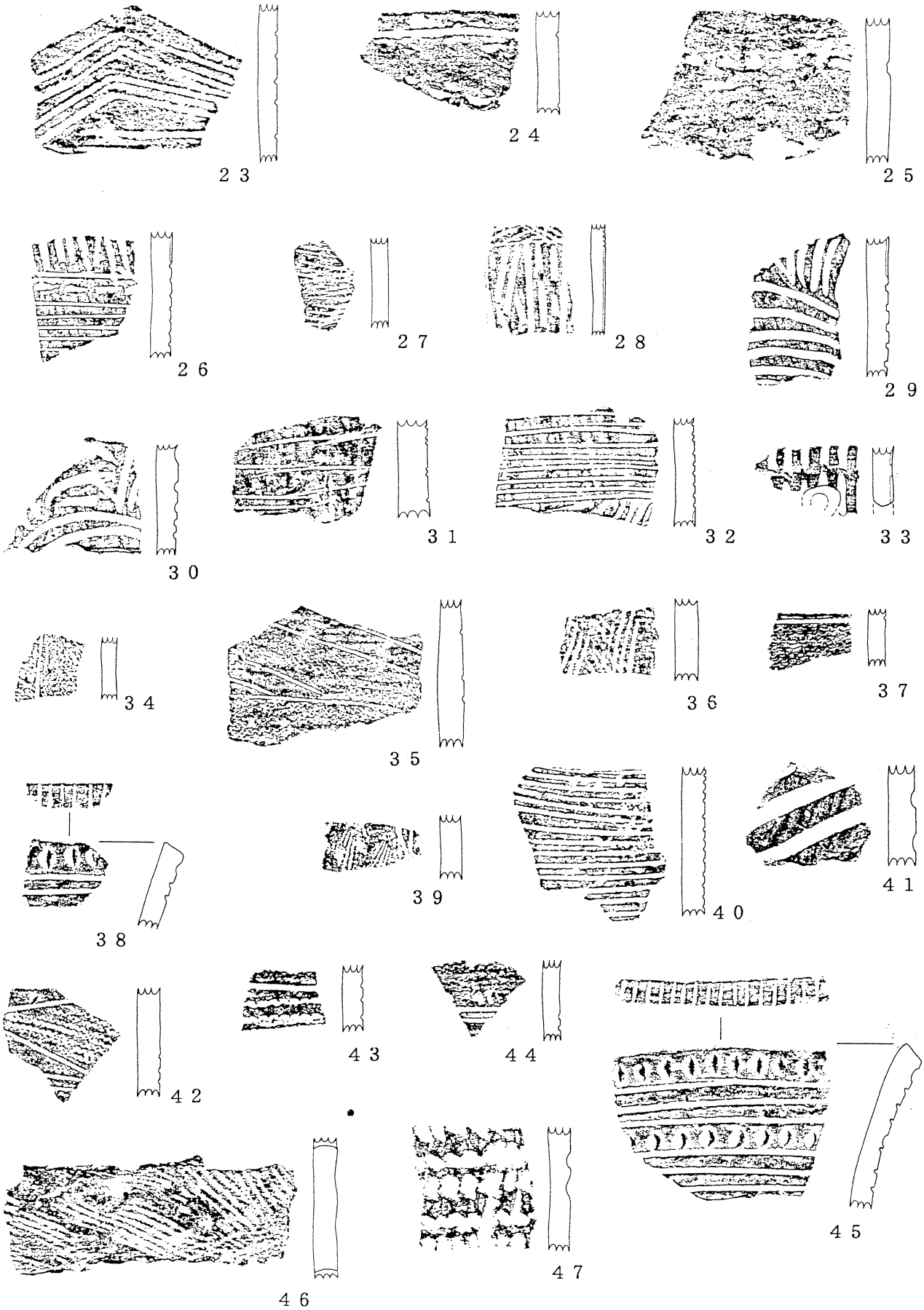
第 14 図 第1号溝・不明遺構（SD－1、SX－1・2）実測図



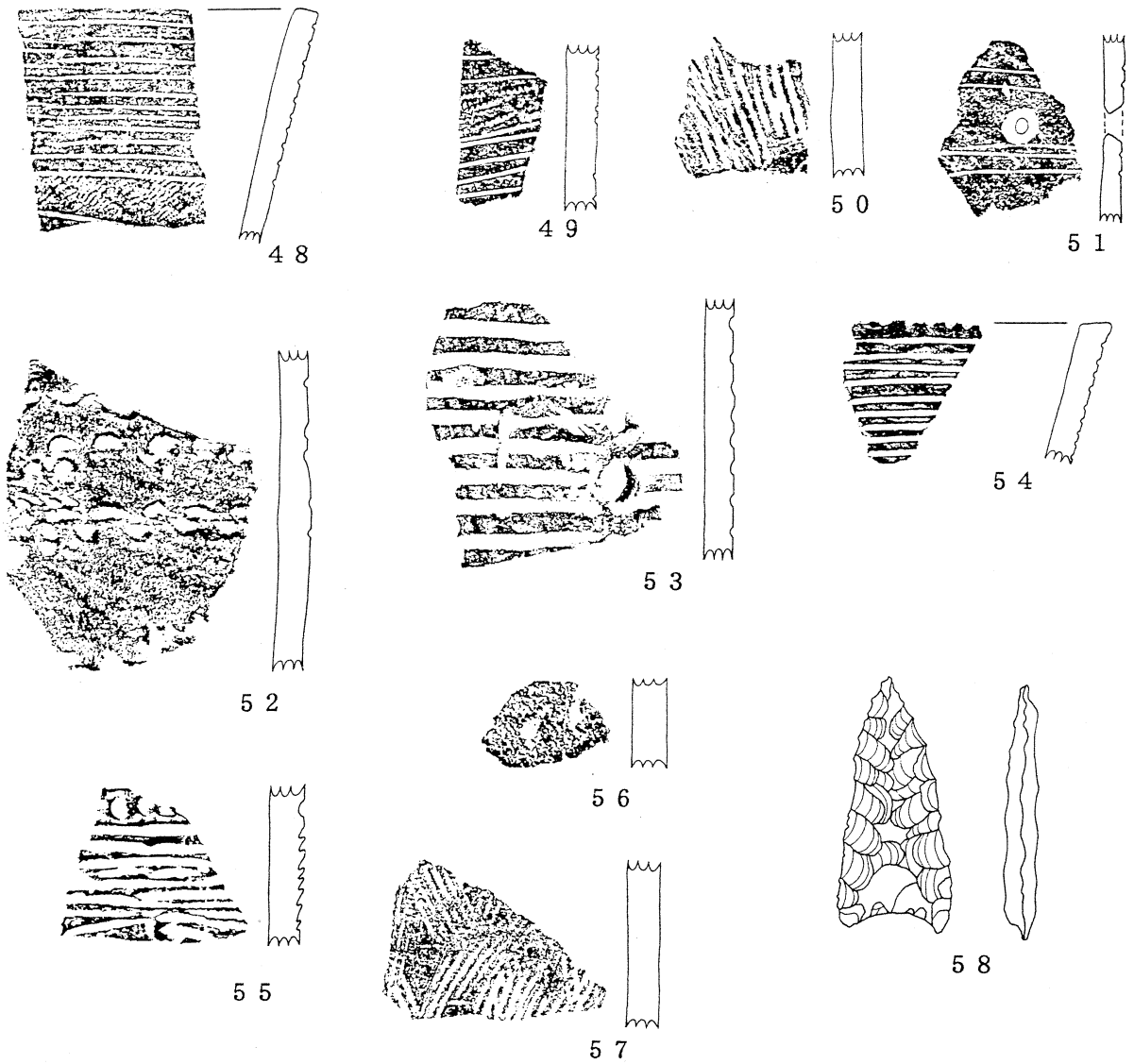
第15図　出　土　遺　物　1　（土師器・須恵器、S＝1/4）



第 16 図　出　土　遺　物　2　（縄文式土器 1、S＝1/2 ）

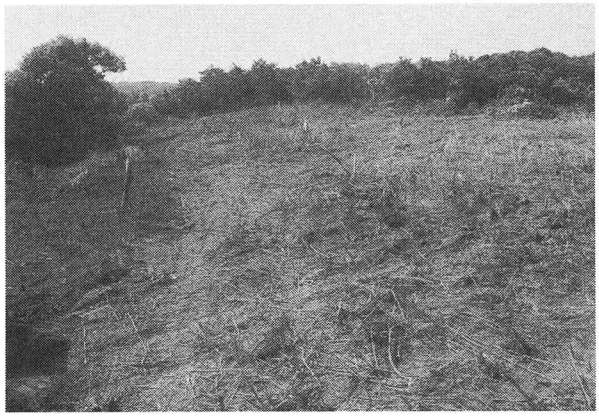


第 17 図　出　土　遺　物　3　（縄文式土器２、Ｓ＝1/2）

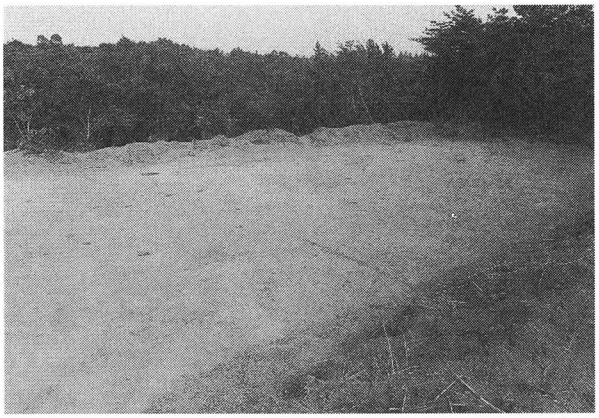


第 18 図　出　土　遺　物　4　（縄文式土器３・1/2 、石鏃・1/1）

図版１　遺跡現況・遺構全景

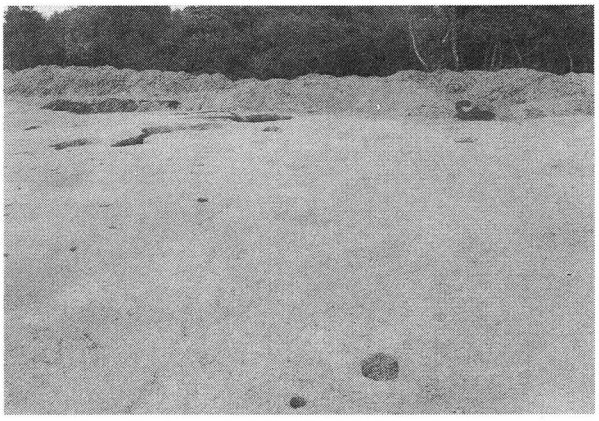


1

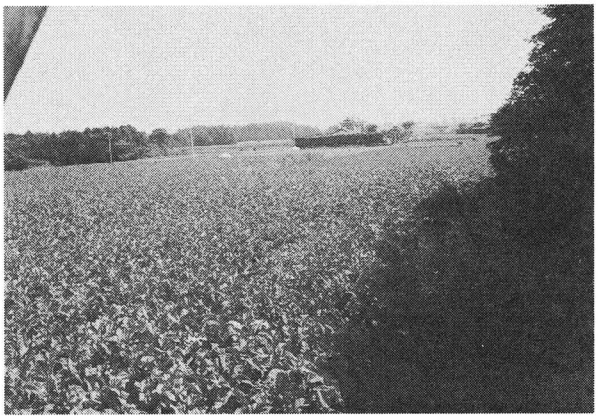


5

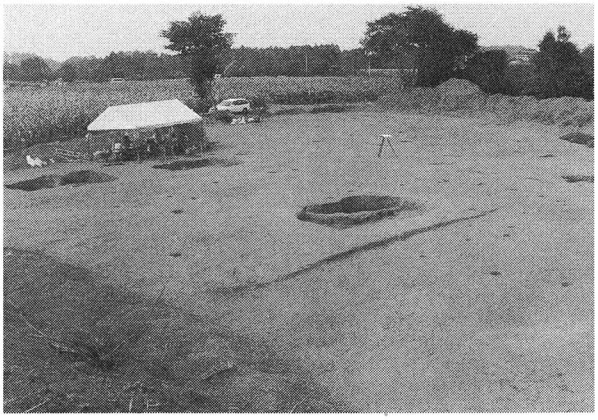
2



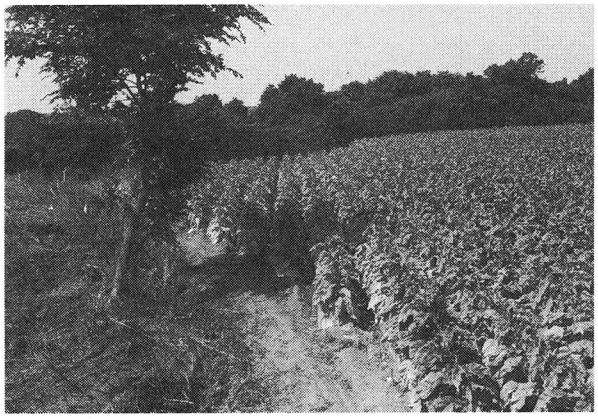
6



3



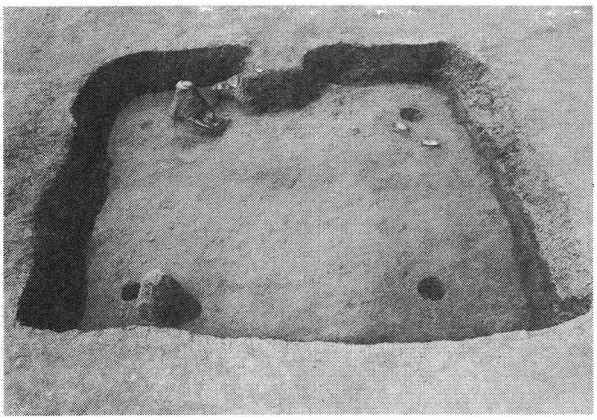
7



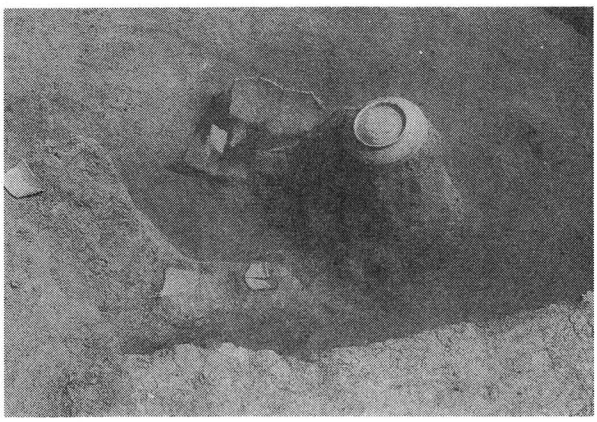
4

1	遺跡現況（中央部）	5	遺構全景（南　側）
2	遺跡現況（南西部）	6	遺構全景（中央部）
3	遺跡現況（北西部）	7	遺構全景（北　側）
4	遺跡現況（北東部）		

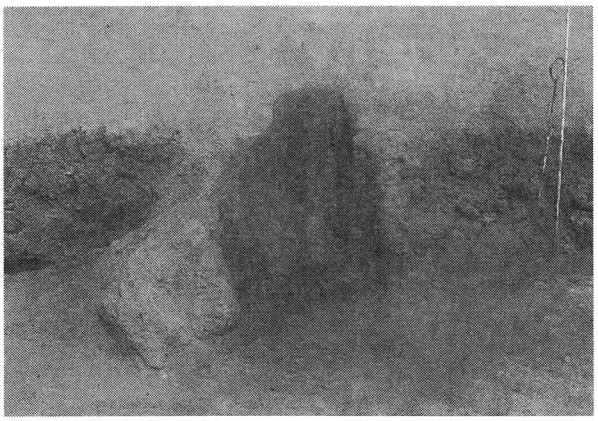
図版２　遺構、住居跡１



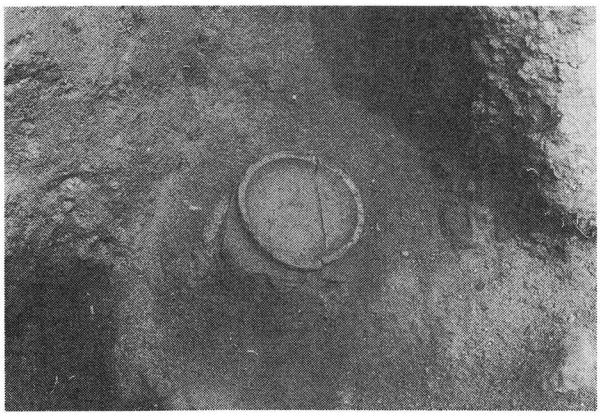
1　第１号住居跡（ＳＩ－１）遺構・遺物出土状況全景



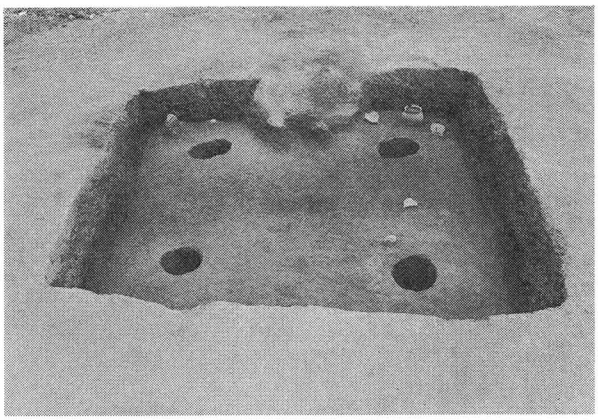
2　第１号住居跡（ＳＩ－１）遺物出土状況



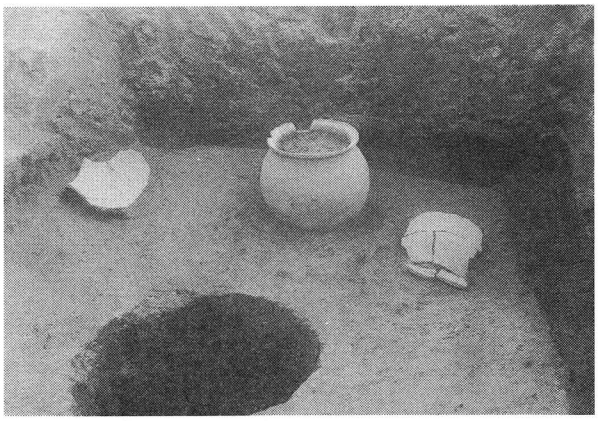
3　第１号住居跡（ＳＩ－１）カマド全景



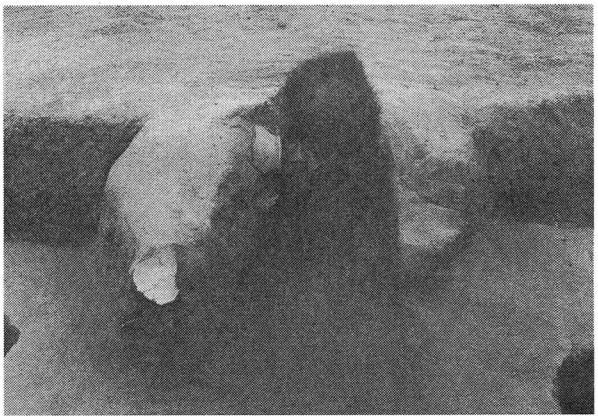
4　第１号住居跡（ＳＩ－１）カマド内遺物出土状況



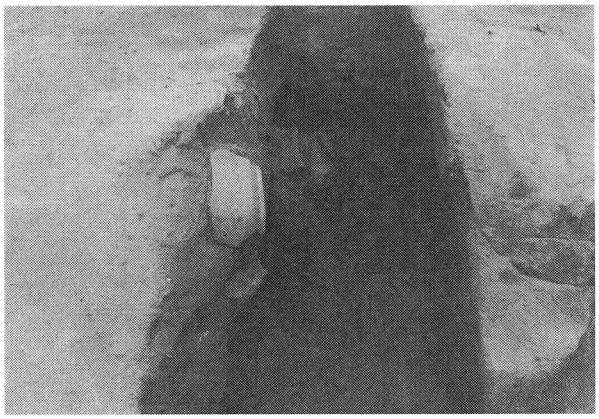
5　第２号住居跡（ＳＩ－２）遺構・遺物出土状況全景



6　第２号住居跡（ＳＩ－２）遺物出土状況



7　第２号住居跡（ＳＩ－２）カマド全景



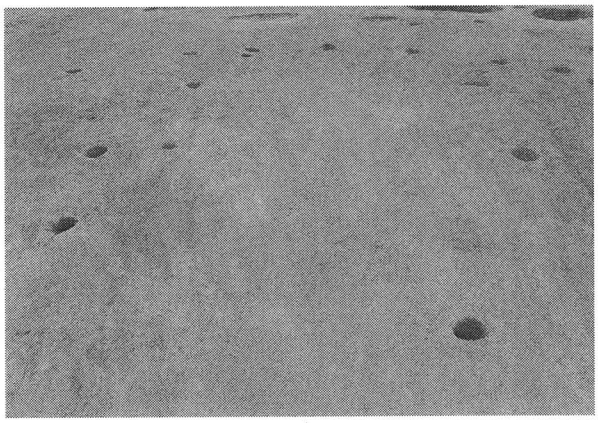
8　第２号住居跡（ＳＩ－２）カマド内遺物出土状況

図版３　遺構、住居跡２・炉跡

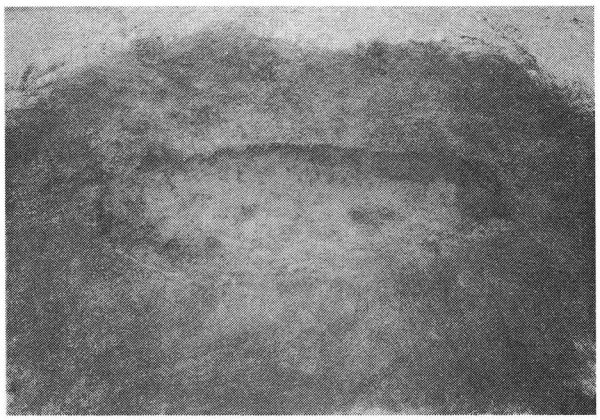
１第３～５・11号住居跡（ＳＩ－３～５・11）全景

２　第６号住居跡（ＳＩ－６）全景

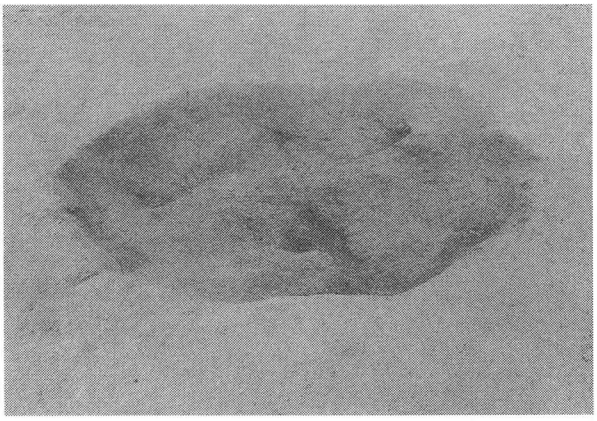
３　第９号住居跡（ＳＩ－９）全景



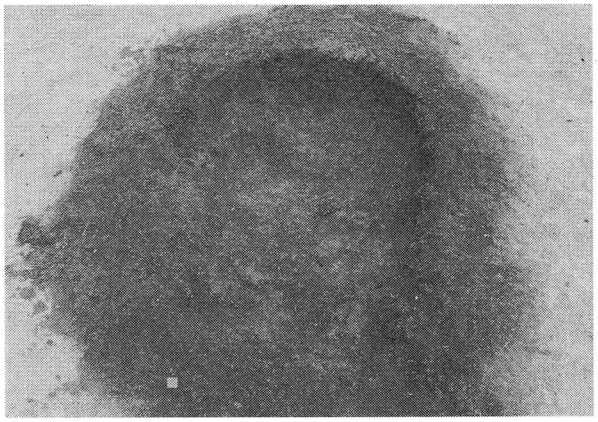
４　第10号住居跡（ＳＩ－10）全景



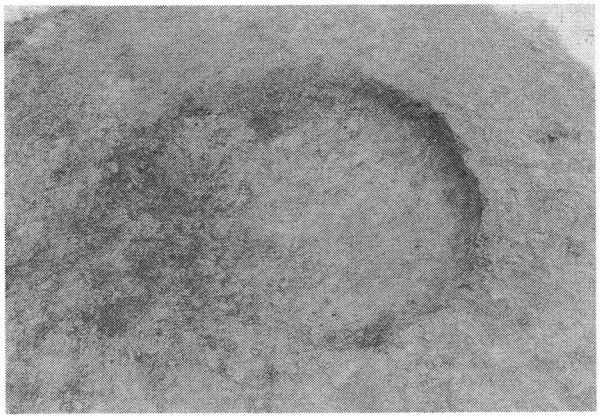
５　炉　跡　１　全　景



６　炉　跡　２　全　景

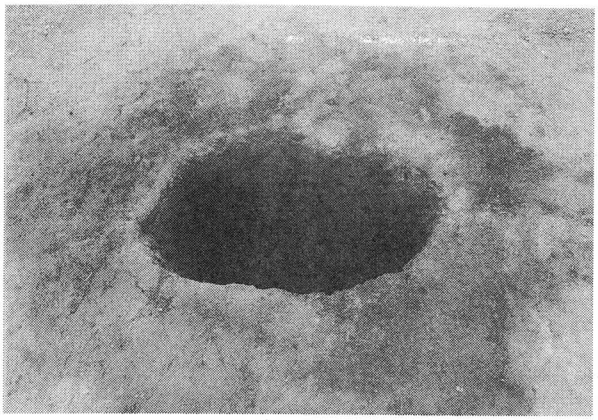


７　炉　跡　３　全　景

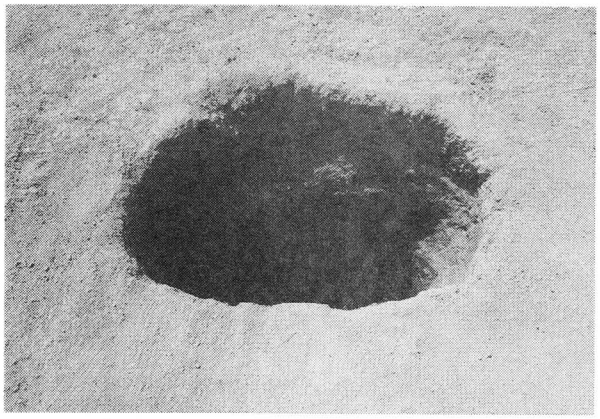


８　炉　跡　４　全　景

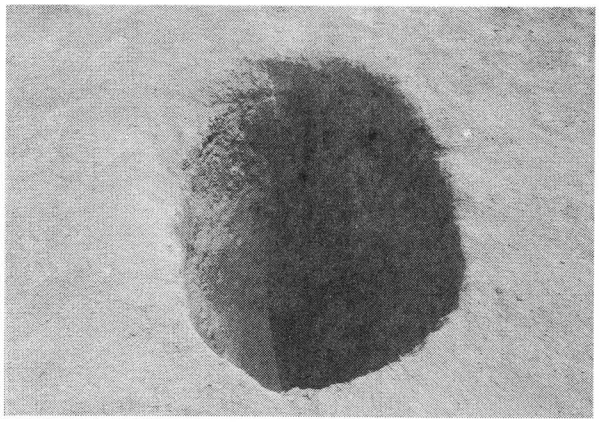
図版４　遺構、土坑



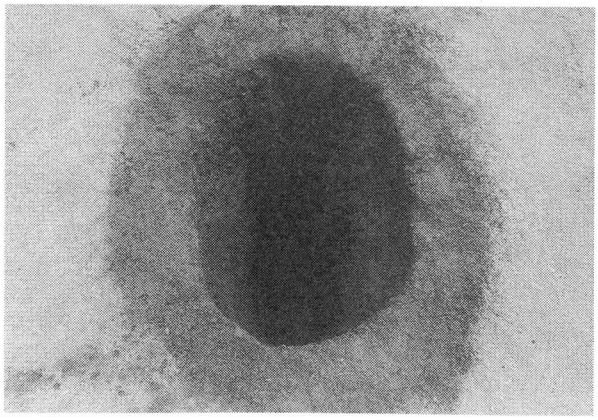
1　第１号土坑（ＳＫ－１）全景



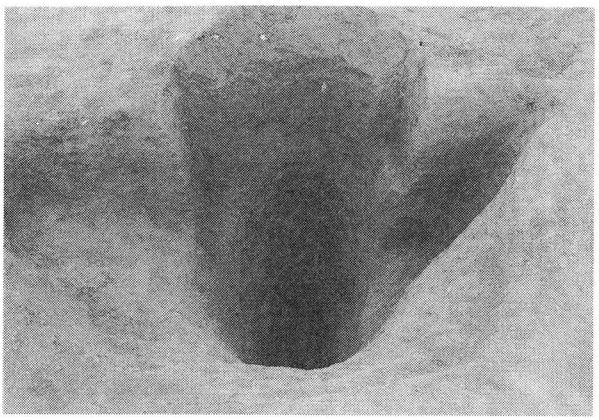
2　第２号土坑（ＳＫ－２）全景



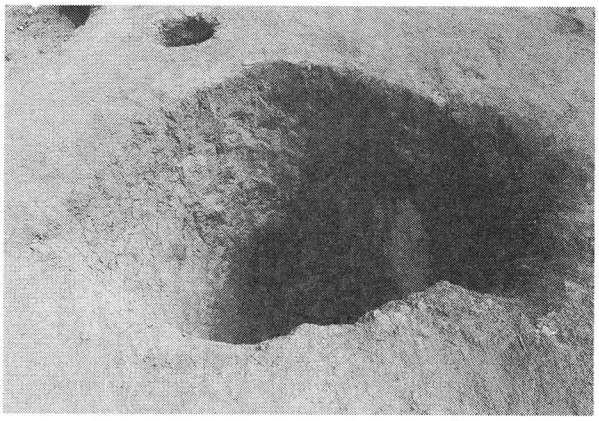
3　第４号土坑（ＳＫ－４）全景



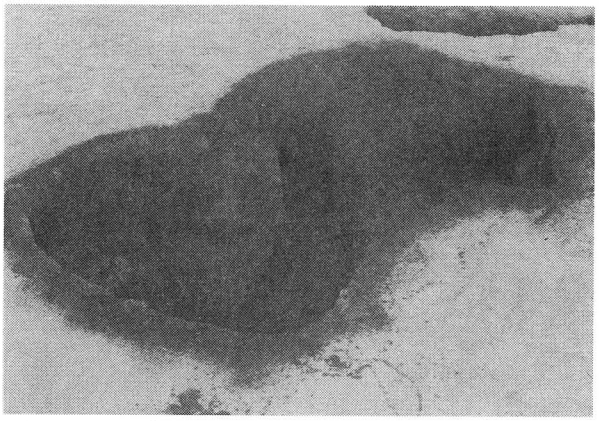
4　第５号土坑（ＳＫ－５）全景



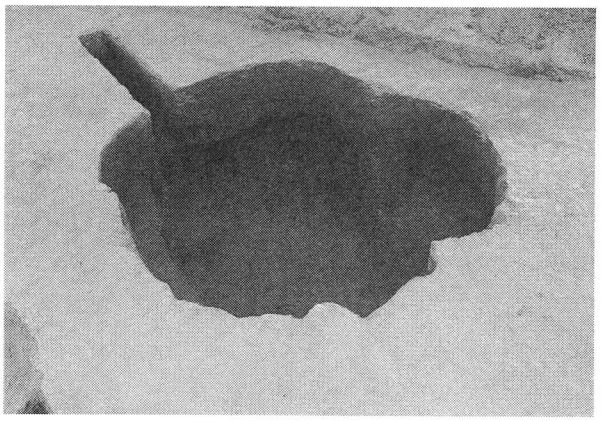
5　第６号土坑（ＳＫ－６）全景



6　第11号土坑（ＳＫ－11）全景



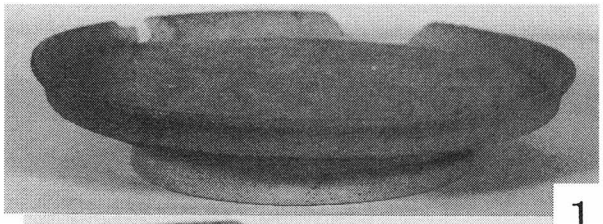
7　第12・13号土坑（ＳＫ－12・13）全景



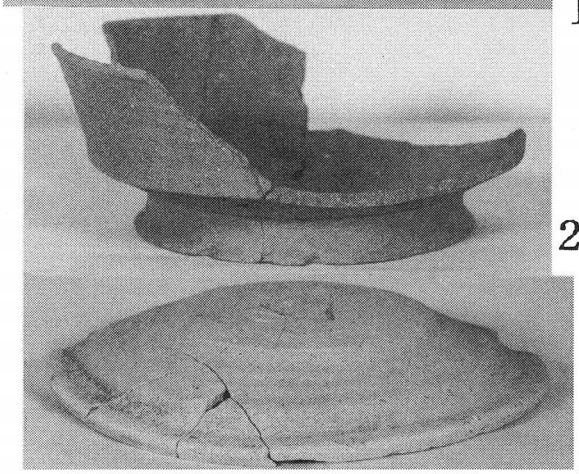
8　第14・15号土坑（ＳＫ－14・15）全景

不明遺構
（ＳＸ－１・２）

出土遺物１、土師器・須恵器

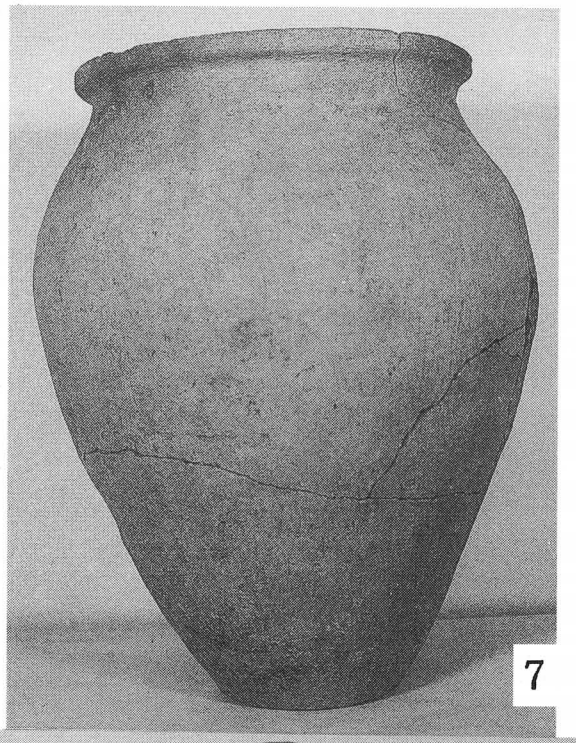


1

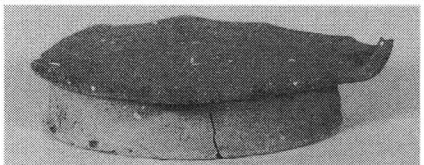


2

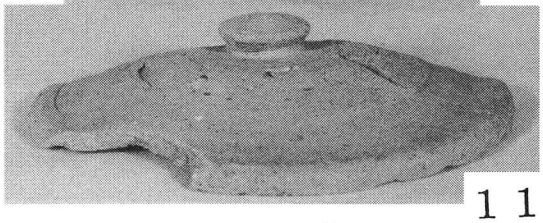
3



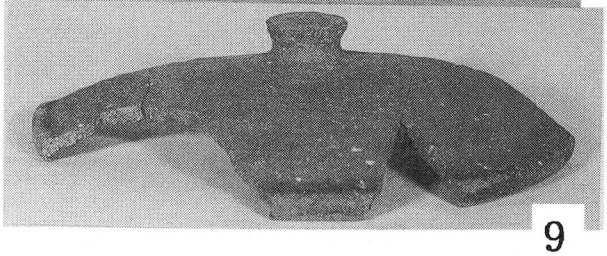
7



6



１１



9

図版６　出土遺物２、縄文式土器・石鏃

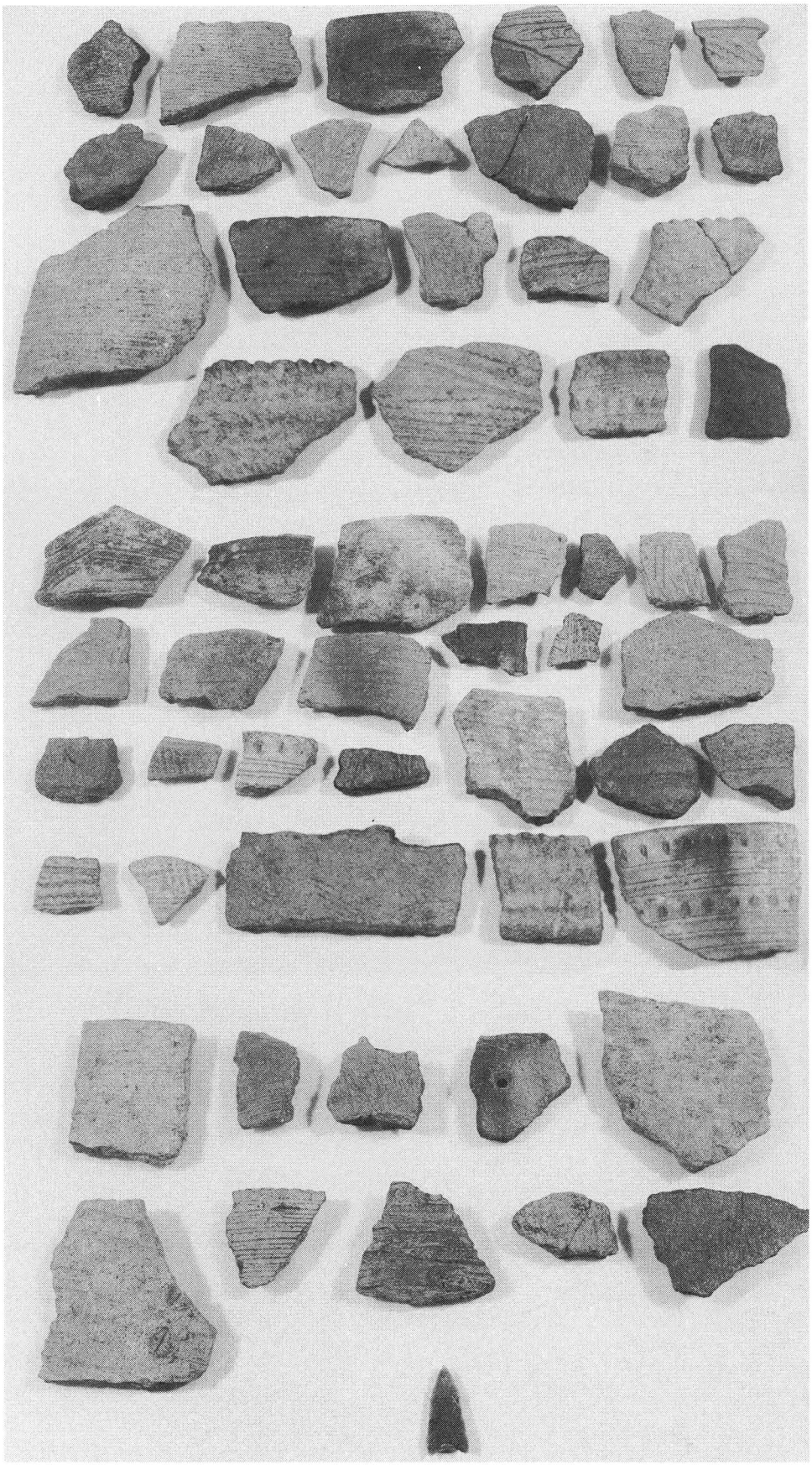
縄文式土器
（１～22）

縄文式土器
（23～47）

縄文式土器

石鏃

（48 ～ 58）



発行年月日　平成 14 年9月

茨 城 県 行 方 郡 麻 生 町

喜 平 台 南 遺 跡 調 査 報 告 書

発行　麻生町教育委員会

編集　常総考古学研究所

印刷　塚 本 プ ロ セ ス